

暁古城になりました。
チート能力付きで

迷走中

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どうも、暁古城になった転生者です。

いろいろと原作ぶっ壊すつもりで、頑張ったのですが。

結局、第四真祖になりました。

風沙が入院して、初めてラノベのキャラではなく、妹だと認識し、助けたかったアヴローラも原作の通りに昏睡状態。

神様にもらったチート能力があっても、油断するとうなるということが分かった俺は、さらに原作をブレイクしながら、風沙やアヴローラ、守りたいと思っている人たちのために、自重せずにチート能力を使いストブラの世界でハッピーに生きていくため

に、足掻きます。

あ、この物語は主人公最強ものです。苦手な人はお帰りください。

※初心者です。至らぬところがあるでしょうがご容赦ください。

ドラえものの道具、MS（魔改造あり）、アトリエ、牧場物語系のシステムと作物、スタンド、流派東方不敗（技のみ）、魔法少女系、アイルーなども出てきます。

苦手な人は本当に逃げてください。

目次

三聖とは長い付き合いですよ（微修正）

1

セバスニヤン

11

本業は高校生兼農家、副業で第四真祖を

やっている者だ。

17

鍋で親睦を深める。（微修正）

26

不機嫌な姫終とペット連れの浅葱

39

お茶会（微修正）

46

ドロスへ散歩（微修正）

63

動きだす

75

クレインゲーム

85

お説教

94

第11話

103

第12話

107

戦わないよ？

113

俺と叶瀬と姫終

120

気持ちがあつた日（島が沈みかけてい

る日でもあつたが）

130

お疲れ様！

136

後片付け

143

束の間の平穏 姫終雪菜①

153

束の間の平穏 藍羽浅葱 & a m p ; 叶瀬

夏音

158

束の間の平穏 南宮那月

167

束の間の平穩 姫終雪菜②

開幕

朝の一幕

登校

174

188

193

198

三聖とは長い付き合いですよ（微修正

俺は死んだ。そうしたら、神を名乗る存在が現れてチート能力をくれると言う。

よくある、異世界転生だと思った。

だから、俺は神様に俺の世界にあったゲームやアニメ・漫画の力が使えるチート能力を望んだ。

さすがに生まれ変わった世界の人たちへの死者蘇生系の力は削除されたが、それでも強力な力だ。

俺はわくわくしながら、赤ん坊時代を夢を見ているような感じで過ごした。

しっかりと自我に目覚めたの二歳半くらいの頃だ。

眼鏡をかけた女性、そして、どこかハードボイルドっぽい悪そうな顔つきのややイケメンの男。

「ハイじょうくん、ごはんですよー」

母の言葉を聞いて、まさかと思った。

けれど、幼い顔立ち、テールブルにおいてあった、郵便物の宛名などをみて、自分がライトノベル、ストライク・ザ・ブラッドの登場人物。

しかも主人公の暁古城になったことに気づいた。

☆ ☆ ☆ ☆

薄暗いな、と俺はそこを覗き見しながら思った。

俺は高校生になった。

原作通りに、個人的にかなり足掻いてみたけれど、俺は結果的に第四真祖になった。

原作の通りに凧沙が入院して、アヴローラも意識不明。

俺の目標は俺が第四真祖にならずに、アヴローラも無事な状態で物語を進めるつもりだった。

けど、ダメだった。あの時だけはイレギュラーが発生して、最後は原作通りになった。

事前の保険で、記憶を取り戻した時。

俺は正直頭に来た。

最初はどこか妹ではないような感じに思っていた凧沙が病院のベッドで眠っている。

アヴローラは原作の通り、アイスが大好きな女の子だ。

俺は本気の本気で、この世界の修正力に反逆し始めた。

いや、すでに反逆をしていたけれど、うまくいっていたから気を抜いて、修正力に引つ

張られ第四真祖になってしまった。

俺は自室の壁に頭突っ込んで、気合いを入れ直した。

俺の最終目的は原作の知識をフル活用して、俺は守りたい人達と共にハッピーに暮らす。

本当は本物の主人公とやぜつちと三人でゲーセンとか行つて遊んでみたかったけれど、それは既にできない。

というわけで、自重しない。

ここからは、俺だけの戦争（ストブラ）を始めてやると心に決めた。

そして、現在。アトリエシリーズやその他のゲームの力をミックスで作り上げたナノサイズの道具を使って、原作ではじめて姫柊雪菜が、俺暁古城の写真を見ているところ
なんだけど。

「こ、これは?」

「つい先ほど第四真祖から送られてきたものです」

少し疲れた感じで、そう言ったのは矢瀬の彼女でもある、眼鏡彼女さんだ。

三聖が来る前に俺が、三人が座る御簾の内側にドラえもののどこでもドアでぽいつと置いておいたものだ。

「お、お見合い写真?」

「それは、第四真祖からです」

「え？」

眼鏡彼女さんの言葉にキョトンとした顔になる雪菜。

それはそうだろう。都市伝説と想っていた存在から、お見合い写真送られてきたんだ。意味がわからないだろう。

「今日、貴女を呼んだ理由は、第四真祖の監視役として絃神島へ渡ってもらうことを伝える為」

「ですが、どういうわけか、第四真祖、暁古城は我々の動きを察知している」

「あらゆる意味で困難な任務、貴女一人に押し付けるようで悪いけれど、幸いなことに第四真祖は貴女を気に入ったようです」

あ、コイツら。俺がネタだからね。と書いたメッセージカードのこと姫終に教えないつもりだな。

「えっと、私はつまり？」

「任務内容を一部変更します。姫終雪菜貴女には第四真祖の婚約者候補として、第四真祖を監視しなさい。そして、第四真祖が人類へ何かをしでかそうとした時は、どのような手段を使って構いません。それを阻止しなさい。もちろん、最終手段としてこれ持っていないなさい」

「え？ あ、はい」

しでかす、と言う辺り親しみを感じるね。

お、御簾の隙間から差し出された銀色の槍。

ああ、あれが雪霞狼か。

「これは？」

「七式突撃降魔機槍」シユネーヴァルツァー」です。銘は雪霞狼です」

「これを……わたしに？」

驚いている姫終に三聖達は少しだけ疲れた感じで小さく溜め息をついた。

代表して、眼鏡先輩が口を開く。

「真祖、しかも底が見えない新しい真祖相手にもつと強力な武具を与えて送り出したのですが、現状これが我々に用意できる最強の武神具なのです。受け取ってもらえますね」

「え、あの、はい。これは受け取りますが、その前にええっと、婚約者？」

「ええ、我々が貴女を監視役に決めて、それを送ってきたということは、向こうはその気のようにです」

「……」

ネタで送ったのに最大限利用するつもりだな。後で眼鏡先輩以外は、お仕置きしてや

ろう。

「それでは、姫柇雪菜。励むのですよ」

やや強い口調で、そういうと姫柇はあわあわしながらも、命令ならしうがないとガツクリと肩を落として、その場から去っていく。

姫柇が十分離れたことを確認して、俺はこちらを見ている三聖に声をかけた。

「途中からよくわかったな。眼鏡先輩達」

「ジツトリとした嫌らしい視線を我々に向けるのは貴方くらいなので」

「失礼な、親友の彼女さんにそんな目は向けないぞ。残りのお二方は別だけど」

「あ、相変わらず、イヤらしくて女の敵ですね」

眼鏡先輩以外は両腕で自分の体をガードする。

他の二人も身体を隠しているが、逆にそれが男心を擽るのに気付かないのかな？
「恥じらっている姿の方が、男心にグツと来るから覚えておくといいよ」

俺の言葉に、眼鏡先輩が青筋たて始めたので、本題にはいる。

「姫柇雪菜は、こちらで預かる。無理強いはしない。安心しろ」

「……そうですか」

俺の言葉に、三聖は安心したようだ。

この三人ともけっこうな付き合いになる。

前三聖が、やってられるか！と引退する前からの付き合いだ。

具体的には俺が第四真祖になる前、小学生の時から接触しているからな。

「俺を利用するのは良い。けれど、彼女さんのお姉さんみたいなやり方なら、許さない。アレについては、お姉さんも知らなかったみたいだしね。それと彼女さん」

「いい加減、その呼び方はやめてほしいのですが」

俺は彼女さんの言葉をスルーする。

「お姉さんと、お兄さん。は元気にしているよ」

「………そうですか」

俺の言葉に少しだけ、ムツとする彼女さん。うん、気持ちちは分かる。

冥駕は今俺の家臣だ。

そして、二人のラブラブっぷりが半端ない。

彼女さん的には、突然行方不明になって心配して、更に組織のトップになってひいひいしていたら、突然連絡がきたと思ったら、第四真祖の家臣になったとか胃痛で死にかけてたね。

更に手紙には元気になっているとラブラブな写真と手紙を送って

くれば、誰でも怒ると思う。

「じゃあ、そろそろ。お仕置きを始めようか」

「「え？」」

「ネタだつてメツセージカード置いておいたよね？」

「……お二人とも、頑張ってください」

「貴様！」

「カードについては、教えないと言い出したのはお主ではないか！」

あー、あー、聞こえない。みたいな感じで二人を見捨てて二人から距離をとる彼女さん。

「大丈夫、彼女さんには矢瀬にたっぷり、遊んでもらうから」

「この、鬼！ 今度はなにさせるつもりですか！」

「人聞きの悪い、ベタな恋愛少女漫画系デートコースを回らせただけじゃないですか、矢瀬が超喜んでいましたよ」

「あ、あれは！」

彼女さんが、そう言いかけた時、残りの二人から恨みがましい目で睨まれる。

「我らが」

「あのような、辱しめを受けているときに、そなたは」

ちなみに、この二人には夢の中で、マツサージをしていただけだ。

ただ、身に付けていたのは際どいビキニの水着で、俺のゴッドフィンガーで天国へ逝かせた。

あ、エロい意味ではない。

ただ、夢を映像化させる道具で、映像化した夢をDVDで二人に送ったら、嫁にいけなくなるからやめてくれと懇願された。

うん、あの映像で二人は、かなりヤバイ顔をしていたからね。

「しかし、偶々とはいえ、三聖が全員が未婚とか、組織的大丈夫？」

「し、仕方がなからう、いろいろと不運が重なったのだ」

「俺的には嬉しいけれどね。だって」

——そっちから、仕掛けてきたとき、遠慮なくお前達を戦利品（女）にできるわけだからな。

チート能力と第四真祖の力をミックスした威圧を使い、三聖を押しさえつける。

でも、若くても三聖になるだけあって、三聖は毅然とした態度で俺がいる方向を睨み付ける。

けど、それも一瞬だけだった。

「あ、今日は触手マッサージの夢だから」

「いやああああああああああああ」

俺の言葉に、彼女さん以外の二人は悲鳴をあげ、彼女さんは、自分は今度何をやらされるのだろうか、顔を青ざめていた。

セバスニャン

姫柊 雪菜は困惑していた。

事前に渡された資料を読んで、暁古城のことを知ったが、彼は本当に第四真祖なのか、と疑ってしまった。

まず、高校生でありながら、ここ数年で農業・医薬品で業績を伸ばした会社の社長であり、超一流の錬金術師であり、空中艦ドロスという巨大な船を自費で製作できる、超一流の技術者でもある。と書かれていた。

二つほど、難病の特効薬を作り出し、錬金術で品種改良した作物で、絃神島の自給率を大幅に上昇させ、個人の戦闘力も眷獣なしでもかなりのものだと言われていた。

「あまり、表には顔を出してはいないけれど、一般人に混じって生活しているなんて」

「姫柊も最初は、第四真祖も他の真祖達のように、豪華な城の奥で玉座にでも座ってい

るのかと思っていた。

もちろん、眷属が居ないのだから、孤高な感じで玉座に座っているイメージだったが、今では農家のようなイメージになっている。というのも。

「ご、ご自身を使って、自社製品をピールですか」

「そうなのニャ。ちなみに、他のモデルは彩海学園のアルバイトの子達だニャ」

姫柊が困惑する理由の一つになっている、猫のような人語を喋る生物、アイルー。迎えの車の中で、信号待ちの時に彼女が何気なく車の窓から外を見ると、目に入ってきた看板（男女八人が野菜や果物を持って笑顔で製品をピールしている）に本人が笑顔で野菜を持っているのが見えて、姫柊が驚くと向かいの席に座っていたアイルーが看板について説明してくれた。

「農業アイドルみたいで、結構人気があるのニャ」

「えっと、かなり昔にTVでやっていた番組の？」

「そうニャ、とあるアイドル事務所の社長さんの娘さんがウチのご主人様のフルーツが

好きでニヤ、娘さんがフルーツを作っている農家を調べたら、小学生の頃の友達で、お互いにビックリしていたニヤ。その繋がりでのお陰でニヤ、次の看板はイケメンのアイドル達がやることになっているニヤ」

「……本当に、第四真祖なのですか？」

空港出迎えにきた執事服姿のアイルー、最初は可愛くて思わず抱き締めそうになった。

けれど、直ぐに姫終の体に緊張が走った。

若いといっても獅子王機関の劍巫の彼女だ。

目の前にいる小さな二足歩行の猫が、ただ者ではないことに気づいたのだ。

それもそのはず、姫終を出迎えたアイルーは暁古城となった男が前世で遊び倒した。モンスターハンターポータブル2Gの最初のお供アイルーであり、ゲーム内での戦闘経験が蓄積されているチートお供アイルーだ。

推定ウカムルバス三十八匹、その他にG級モンスター多数を倒した経験を持っている

アイルーが現実の世界に合わせた力を持って降臨する（装備・スキル・絶対に死なないゲームでの設定付きの不死の超一流のドラゴンスレイヤー）。

各国にとって悪夢だが、幸いアイルーの容姿と暁古城がアイルーをあまり戦闘（揉め事）に出さないで、アイルー達の実力はアイランドガードの精鋭くらいだと認識されている。

手加減した状態でも十分強いので、数名のアイルーが南宮那月の要請でアイランドガードでバイトをしていたりする。

「ご主人様ニヤは、優しい人ニヤ。にやから、そんなに緊張せずにするニヤよ」
「は、はいそうですね」

迎えの車は結構な車だった。

セバスニヤンは「たいしたグレードではないニヤ」といつていたが、姫柊にとっては高級車で出迎えが来ること事態が驚きだった。

ただ、運転手が普通の人間だったのは、心から安堵していたが。

「ここが、ご主人様がいるビルだニヤ」

出迎えの車が停まったのは、他の大企業が集まっているエリアより、大分離れた場所にあるビルだった。

ここ数年で、業績が上がったとはいえ、暁古城が経営している会社はまだ若い、それ故にビルも二流とも言える場所だ。

とはいえ、暁古城は完全な商人になるつもりもなく、またなれるとも思っていないので、その辺りのことは気にしていない。

なにより、現在。暁古城が絃神島の自給率をあげたお陰で、本土では食料品で儲けていた企業とそのバックについていた政治家と敵対関係となつているため、荒事が起きる（既に色んな理由で揉め事は起きているが）ことを考えると、大企業が集まっている場所にビルを構えるのはよろしくない。

暁古城が、外れた場所にビルを構えたのはそういう意味合いもあったりする。

「いちばんいいですよ」

姫柊が案内されたのは、ビルの最上階。

その階の社長室で、暁古城と姫柊雪菜が初めて顔を会わせることになった。

本業は高校生兼農家、副業で第四真祖をやっている者だ。

「うん、今回の件は残念だと思っっているよ。俺も会えるのを楽しみにしていたよ」

俺は、姫柊雪菜を社長室で待っていると、子供の頃からの知り合いから、スマホへに電話がかかってきた。

一週間ぶりの連絡だったので、久しぶりに声が聞けるとウキウキ気分で、電話に出ると何故か馬鹿！ 怒鳴られた。

どうも、監視役が婚約者候補を兼ねていることに驚き、俺が何かまたやらかしたのではないか？ と思っつて連絡してきたらしい。

「うん、だから、さっき言った通り、婚約者候補は三聖の悪ノリだ。もちろん、監視役にそういう意味合いが全くないわけではなかっただろうけれど、俺の悪戯に三聖がのっかつた結果だよ」

少し冷静ではない電話相手の愚痴を聞いて、落ちついたところでこちらの事情を説明すると、彼女も信じてくれた。

「あと、俺は監視役の選定にも関わっていない。関わっているなら、監視役は二人になっているはずだよ？ 理由？ そんなの二人とも可愛いからに決まっているからじゃな

いか」

俺の言葉に、電話の相手が呆れたようにため息をついた。

子供の頃から、俺のことを知っているから、しょうがないなあ。という感じだ。

「それに、忘れてほしくないのは、第四真祖の立場つてもものすごく危うい。親族がいない、孤児を監視役にするのは、ある意味当然だよ？ 死んだときもそうだし。上手くいった場合も考えればね」

俺の言葉にどういう意味？ という雰囲気を感じたので、彼女に教えておく。

「単体で国を一つ滅ぼせる戦力の妻になる。そうなった場合、その妻の親族達は甘い汁を吸いやすくなるよな。個人的にあのおじさんがそういうことをする人でないと分かってはいるけれど、家柄と親族のことを考えると、おじさんの立場上、何らかの事情で動かないといけない場合が起きるかもしれない、例えば妻を人質にされた場合とか」俺の言われて、電話の相手は「あっ」と声をあげた。

昔からあることだ。

「そう、つまり今回の監視役はそういうところも、気を使わないといけないんだ。三聖は若いし、上の方は放任主義だし、政治的な後ろ楯は馬鹿ばかりだし、今ごろ三聖は胃薬でも飲んでるんじゃないかな？ 一ヶ月前にこちらにちよつかいかけて痛い目を見せた政治家って、たしか獅子王機関の支援者の一人だったし」

俺の言葉を聞いて、電話の相手は「わかったわ」と呟いた。

「個人的に、会いたかったのは本当だ。だから、今度会いに行っても良いかな？ うん、ありがとう。それじゃあ、またねゆーちゃん」

俺が通話を終えて直ぐにストブラのメインヒロイン、国家公認ストーカー、姫終 雪菜が到着したようだ。

さて、気合いをいれますかね。

俺と俺の大切な人たちを守り、ハッピーにこの世界で暮らすために！

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

社長室の扉がノックされ、俺は「どうぞ」と扉に向かって、声をかける。

一流企業の無駄に広い社長室に比べて、俺の会社の社長室は、広いがまだ常識的な範囲だ。

「失礼しますニヤ」と声が聞こえ、ガチャリと社長室の扉が開く。

まず、目に入ったのは執事服を着たアイルーが体をスイングさせながら、扉を器用に開けている姿だった。

うん、秘書の子は今全員出払っていたんだった。

俺は直ぐに椅子から立ち上がり、扉に足早に近づくと、セバスニヤンの体を持ち上げ

て、床に下ろしてやる。

「迎え、ご苦労だった。セバスニヤン」

「いえいえニヤ」

「叶瀬にお茶を頼んできてくれ」

「かしこまりましたにや」

セバスニヤンはそう言うのと、姫終に綺麗な一礼をしてみせてから、社長室を出ていく。戸惑っている姫終に「扉閉めるから」と告げると姫終は慌てて、社長室の中に入る。

「あ、そこに座ってくれ」

「は、はい」

来客用のテーブルと椅子に向かい合って、座り。

俺は自己紹介をした。

「俺が暁古城、本業は高校生兼農家、副業で第四真祖をやっている者だ」

俺がそう言うのと姫終も自己紹介をした。

「姫終雪菜です、えつと貴方様の監視役を」

「大丈夫、緊張しないで、と言っても無理だろうけど、言葉遣いとかは君の普段通りでいいよ。三聖から君の話は聞いているから」

「え、あの、三聖の方々とは……?」

「子供の頃からの知り合いだよ。 俺が第四真祖になる前からね」

「え？」

驚く姫終に今後のために、俺は元人間だったことを教えてやる。

「今年の春に俺は先代の第四真祖から、力を引き継いだひよつ子真祖だよ」

「力を引き継いだって」

驚いた顔をしている姫終に俺は、分かりやすく説明した。

「食べたんだよ。第四真祖を性的に」

「. え？」

俺の言葉の意味が理解できず、一瞬固まる姫終、しかし直ぐにその意味を理解して。

「え、ええええええええええええええええ!!!!」

「ま、嘘だけど」

「なっ!?!」

顔を真っ赤にして叫んだ姫終に、俺は直ぐに嘘だと言うと、からかわれたと思った姫終の顔が更に赤くなったが、姫終が怒鳴る前に俺は先に口を開いた。

「守れなかったんだ」

「え？」

「俺が甘かったから アヴローラ・フロレスティーナから、第四真祖の力を奪

う羽目になった」

自分でも驚くほど、低く獣のような声で、俺はそう言っていた。

あの時の事は、完全には思い出しではない。

けど、保険で俺達を撮影させていたアイルー達の映像で大半の事は思い出している。

「あ、すまん。驚かせた」

「い、いえ、大丈夫です」

俺の無意識のオーラで、姫終の顔色が少し悪くなっている。

少し休ませるかと思っていると、扉がノックされた。この気配は、叶瀬か。

俺はちよūdよいと、思いながら「どうぞ」と扉へ声をかけると、扉が開けてティ-

セットを乗せたカートを押しながら、叶瀬が入ってきた。

「お兄さん、お茶お持ちしましたです」

「ああ、ありがとう叶瀬。それと姫終、彼女は姫終と同じ彩海学園に通っている。さらに

俺の妹の風紗の友達でもある。仲良くしてやってくれ」

「え、あ、はい」

「叶瀬夏音です。よろしくおねがいますでした」

「姫終雪菜です、よろしくお願ひします」

「じゃあ、叶瀬。この後仕事の話があるから」

「はい、分かりました。お兄さん」

その言葉に、叶瀬は直ぐに社長室から出てく。

俺は椅子から立ち上がり、叶瀬が持ってきたティーセットで、紅茶を入れる。

「あ、あの」

「あ、先にいっておくけど。妹の風紗には俺が第四真祖だということは、内緒にしてくれ。渡された資料に書かれていただろう？」

「あ、はい。書かれていました」

「なら、良い。その辺を気を付けてくれるなら、監視役は受け入れるから」

「えっと、受け入れるんですか？」

「ああ、婚約者候補だしな」

「あつ、そうです。それはどういうことですか！」

「どういうつて？」

「お見合い写真や私が婚約者候補って！」

慌てる姫終に、俺は微笑ながら、姫終にこう言っておいた。

「姫終が好みのタイプなんだよ」

「え、ええっ!?!」

うん、嘘は言っていないけど、今の一言で視界の左上に開いていた、フレンド欄の姫終

雪菜の好感度（ラブの方）がレベルが1上がった。

チヨロいん過ぎるだろう、この子。

毎日、ネコマタングッズを一日一回あげていれば、三ヶ月くらいで、結婚可能なんじゃないか？　と思うくらいに。

「ま、何はともあれよろしくな。あ、俺のことは社長ではなくて、先輩と呼んでくれ」

「え、はい。構いません。えつと先輩」

「ありがとう。ここ数年、学校の連中も俺のことを社長呼ばわりで、少し寂しかったんだよね」

「そ、そうですか・・・」

「それじゃあ、姫終の引越し先へ行こうか。こっちで部屋は用意してあるから」

「え？」

驚く姫終に、俺は言った。

「安心しろ、俺が住んでいるマンションで、部屋は俺の家の隣だ」

俺がそう言うのと姫終は更に信じられないという顔で俺を見た。

「監視がやり易いだろう？　お礼は？」

「え、えつとありがとうございます？」

「いえいえ、どういたしまして」

「……先輩って、変な人ですね」

「よく言われる」

俺はこの後、姫終と共に家に帰り。

その日の夕食は、凧紗と叶瀬、俺と姫終の四人で鍋を食べることにした。

原作より数日早めに姫終と合流したので、ロタリングアとの戦闘はなかった。というか、まだあの男は絃神島に到着していない。

ま、あの男に関しては、二度と外を出歩けないようにするけれど、人種差別は嫌いなんでね。

鍋で親睦を深める。(微修正)

お茶を飲んだ後、姫終と叶瀬と三人で車で家まで送ってもらう。その途中にコンビニで風沙の好きなアイスを購入してから、二人を俺の家へ案内する。

俺の家に入る前に一応、隣が姫終の部屋だと教えておく。

「鍵は後で渡すから」

「は、はい」

原作だと獅子王機関が部屋を用意しているが、今回は俺が部屋を用意したので俺がその鍵を持っている。

後で忘れないようにしないと。

「ただいま」

家の玄関の鍵を開けて中に入ると、風沙の気配がする。そういえば、今日は部活がないと言ってたな。

「あ、おかえり古城くんって、夏音ちゃんだ！ もー夏音ちゃんが来るなら教えてよね。てっ、古城君、その後ろにいる子は？」

また拾ってきたの？ と言わんばかりの目だ。

うん、今回は違うぞ、妹よ。

「この子は友人の攻魔師のお弟子さんの姫柊雪菜。風紗と叶瀬とは同学年だから、仲良くしてやってくれ」

「ああ、その子が前に古城君が言っていた女の子？ うわゝ改めてみると美人さんだね！」

「え、そんな、美人では」

「あたし、暁風紗。よろしくね」

「は、はい、わたしは姫柊雪菜と申します」

「あはは、固いよ。あ、あたしのことと呼び捨てで良いからね」

家に帰ってきたときはリビングのソファでグデツとしていた風紗だったが、俺が二人をつれてきたことで慌てて立ち上がり、姫柊の容姿を見てやや興奮していた。

その後は風紗がグイグイと姫柊に質問をし始めて、姫柊がタジタジになっている。

叶瀬をはじめて連れて帰ったときも似たような感じだったな。

ま、あの時はまだ客を連れて帰ることが少なかったから、どちらかという誘拐してきたんじゃないかと勘違いしていたが。

「それと、風紗。姫柊はこっちに引越してきたばかりだから、色々と相談に乗ってやってくれ」

「うん、分かったよ。ところで、今古城君が持っているコンビニの袋はもしかして」
「俺に他社製品を買わせるとは良い御身分だな」

やや威圧的な笑顔でそういいながら、コンビニの袋を風紗に差し出す。

「いやあ、古城君の所も美味しいんだけどさ。なんというか、このアイスの安っぽい味が癖になつてさ」

俺の言葉にあははと愛想笑いをする風紗。

最近、風紗のお気に入りのアイスは、俺の会社の製品ではなく他社製品だ。

その他社製品を、家に帰ってくるたびに買ってきて、と最近うるさいのだ。

「安っぽい味ね。気持ち分からはないけど、せめて懐かしい味と言ってやれ」

「うーん、そうだね。あ、夏音ちゃん、雪菜ちゃんもこっち来て座ってアイス食べよ！」

「え、でも」

「姫終、気にするな。アイスくらいなんてことないから。それくらいは稼いでいるから安心しろ。叶瀬も遠慮するなよ」

「はい、いただき、ました」

「あ、ありがとうございます」

叶瀬は目をキラキラとさせながら、姫終はと少し戸惑った表情で俺からアイスを受けとる。

って、コラ風沙。二つも持つていこうとするな。それは俺の分だ。

「それじゃ、俺は姫終の歓迎のための鍋でも作りますかね。風沙、鍋にするから部屋の温度少し下げてくれ」

「りゅーかい、あたしも手伝うよ。．．．．．アイス食べたなら」

俺の横をすり抜けて、人数分のスプーンを持つていこうとする風沙にすれ違いさまにデコピンを叩き込む。

手加減をしたが、それでも良い音がして、風沙は「ぎゃん」とかわいくない悲鳴をあげて、その場にしゃがみこんだ。

今までにも何度も食らっているのに、大袈裟な。

「だ、大丈夫ですか、風沙さん」

「うー、痛い」

「お、おでこ、真っ赤になってます」

「もう酷いよ。古城君！」

「良いから、食ってこっちを手伝え。あ、姫終と叶瀬は座っていてくれ、お客さんだから」

姫終と叶瀬が手伝うと言いそうだったので、先手を打っておく。

普段なら別に良いけど、今日は姫終の歓迎会だ。

手伝ってもらおうわけにはいかない。

「二人ともそんな困った顔をするな。またウチで飯を食うこともあるだろし、手伝いはその時してくれれば良いからさ」

俺はそう言いながら、キッチンに端にかけていた俺専用の飾り気のないクリーム色のエプロンを身に付けて水道で丁寧にも手を洗い、夕飯の支度を始める。

風沙が普段よりも早めにアイスを食べ終えこちらの手伝いに入ると、話を振っていた風沙が居なくなったことで姫終が叶瀬と何を話せば良いのか戸惑っていた。なので俺が色々話を振ってみると、姫終は俺の助け船だと気づいて助かったという表情で話始めた。

美少女の叶瀬と二人で、話をするのは初対面ではかなり難しいだろう。

出来るのはコミュ力が高い風沙くらいだ。

あ、もちろん、風沙は直ぐに野菜の下ごしらえをしながらも、会話に参加して話を盛り上げている。

「じゃあ、そろそろ良い頃合いだろう」

テーブルの上にカセットコンロを設置して、土鍋を置く。既に、スープは良い感じに温まったので、手早く順番に具材をいれ、コトコト煮込んだ自信作の鴨鍋が完成。

鍋の蓋を開けると、ふわっ食欲をそそる良い匂いが辺りに広がる。

「うわあ、美味しそうだね」

「はい、美味しそうです」

「す、凄い……」

「知り合いの鴨を育てている人から貰った、かなり良い鴨だ。味わってくれ」

風沙と叶瀬はある程度見慣れているが、最高級の食材と俺の高い料理熟練度で作られた鴨鍋は、見た目からして涎が文字通り出るほど美味しそうだ。

「それでは、いただきます」

「いただきます(です)」

ウチの会社で作っている野菜は、天皇家にも献上している自慢の野菜だ。

前世の天皇陛下のこともあり、これだけの野菜ができたのだから是非食べてもらいたいと天皇陛下に献上したら、宮内庁の料理人の一番偉い人が献上して直ぐに俺のところへやって来て自費で野菜を購入するようになった。

そのお陰で、各国の要人に雇われている料理人達からも注文が殺到して、一時期大変な目に遭った。

恐るべし、牧場物語の土と野菜と肥料。

「鴨以外はウチの野菜だ。沢山あるから食べてくれ」

「古城君、鴨のおかわりは?!」

「ない。後は矢瀬と浅葱と叶瀬の義父さんとウチの母さんの分だ」

「あ、ありがとうございます。お兄さん」

「気にすんな。明日の夜まで行けるから、お土産にもっていけ」

申し訳なさそうにする叶瀬にそう言いながら、俺の分の鴨肉を風沙の取り皿に入れてやる。

「あ、ありがとう、古城君」

「気にすんな。……今日学校終わって会社で一息ついたときに、味見としてチキンステーキ食ったしな」

「ああっ！　ズルい古城君！　何それ美味しそうなんだけど!？」

「今度、作ってやろう！　感謝するが良い!!」

「ははあく」

俺達兄妹のやり取りを見て呆気にとられている姫終と、楽しみに上品に笑う叶瀬。穏やかで楽しい歓迎会は、成功と言って良いだろう。

それから四人で話ながら食事をしていたのだが、やはり叶瀬には少し多かつたようだ。

「叶瀬、辛いなら無理に食べるな」

「す、すみません。美味しくて食べすぎてしまいました」

一応、量は調整したのだが、まだ叶瀬には多かったようだ。

「あ、そういえば、デザートプリンも用意していたけど、その様子なら持つてかえ、「いいいただきま、した!!」

「あ、ああ、今持つてくるから、そんな親の仇をみるような目で見ないでくれ」

持つて帰るか? と聞く前に叶瀬がキラキラではなくキラキラとした眼力を向けてくる叶瀬の圧力に、俺は思わず身体を引いてしまった。

俺が原因で、叶瀬は原作以上に甘いものが大好きになつていたな。

そういえば、最近ちよつとふつくらしてきたか? 原作だと細すぎる感じだったけど、今は良い感じに肉がついている気がする。

「あははは、夏音ちゃんすっかり古城君が作るスイーツのファンだね」

「え、先輩がプリンを作ったんですか!?!」

「そうだよ。古城君つて、勉強以外は何でもできるけれど、料理は特に上手なんだ。一流シェフ並なんだよ」

姫終は驚きながら、小声で「第四真祖がプリンつて……」と呟いていた。

それと風沙。才能沢山あつて不公平だよ。とぶーたれているが。俺はお前のコミュ力の方が羨ましいぞ。

会話だけで仲良く慣れるつて、素晴らしい才能だと思う。

だって、俺が話し合うと必ず。

説得（物理）か、話し合い（肉体言語）になるからなあ。

本当に羨ましい才能だ。

「不公平だと言われても、料理を始めたきっかけは風沙、お前の為だぞ。それに文句を言われても困るな」

「分かってるって、感謝してますよ」

俺が苦笑い気味にそう言うと、風沙もごめんごめんと軽い感じで謝ってきた。

「えっと、先輩が料理をって、どういうことですか？」

「ああ、俺の両親は共働りで、小さい頃は母さんもそれなりに帰ってきていたんだけど。家のことは基本的に自分達でやる必要があったんだ。母さんの部下の人が時々手伝いに来てくれたけど、そればかりに頼るわけにはいかなかったしな」

「最初の頃は酷かったよね。焦げた目玉焼き」

「生焼けのハンバーグ」

俺と風沙が昔の家族の思い出を話すと、姫格が少し寂しげな顔をしたので俺は話題を変えらることにした。

「そういえば、叶瀬。ニーナ先生は元気か？」

「はい、元気ですよ。孤児院のみんなも元気です」

「そっか、なら良かった。ここ最近顔を出せていなかったからな」

「あの、孤児院とは？」

俺と叶瀬の会話に姫終が反応したので、ざっと説明する。

叶瀬と姫終が仲良く成れるきっかけになることを祈りながら。

「叶瀬はニーナ先生という方が運営している孤児院の出身で、今は伯父さんに引き取られているんだ。それで時間を見ては孤児院の子供達と猫の面倒を見ているんだよ」

「へー、そうなんですか。……猫ですか」

姫終が猫に興味を持ったので、この日のためにスマホで撮り貯め集めておいた、叶瀬が世話をしていた猫達の画像フォルダが火を吹くぜ！

こうして、そこからは猫の画像で話が盛り上がり、今は叶瀬と姫終が俺のスマホの猫画像フォルダを見ながらキヤーキヤー言っている。

そして、然り気無くタイミングを見て俺のとなり移动到ってきた風沙が、俺の耳元で囁いた。

「もしかして、雪菜ちゃんのご両親は」

「ああ、居ない。ただ、よくしてくれた人達が沢山いる。お姉さん代わりの人もいる。だから、その辺は大丈夫だ」

「そう、なら良かった」

第四真祖になる前から、俺は原作とは違い、訳ありの人間を助けていた。もちろん、打算はあった。

将来力になってもらうためにだ。

俺の行動を風沙は不快とは思っていないようだった。

「頑張つてね。古城君」

「ああ、頑張るさ。妹のためにも、カツコイイ兄貴を目指しているぜ！」

そうだ。

もう、ヘマはしない。してたまるか。

とはいえ、不安がないわけではない。

俺の原作知識も完全ではない。

単純に敵を、他の真祖を倒すだけなら、可能だろう。

だが、恐らく原作のラスボスと思われるカイン——初代第四真祖と戦うとなると、眷獣を掌握していない状態で倒せるかと問われれば首を傾げてしまう。

俺のチート能力は、この世界に合わせてバランス調整がされている。

それでも、強力な力だ。

サテライトキャノン、マクロスキャノンでも使えば国を滅ぼせるが、ラスボスに通用するか分らない。

もちろん、勝てるだろう。と思える戦力は保有している。

ガンバスターやイデオン、真・ドラゴン辺りを使えば、まず勝てるだろう。その代わり、世界滅亡するけど。

他の強力な戦力、例えばポケモン達もいるが、ひんし状態で死ぬことのなかったゲームとは違い、この世界では一歩間違えると本当に死んでしまう。

なので、簡単には使いたくはない。

そもそも、現状ではアイルー達だけでも過剰戦力なのだ。

各モンスターに合わせて鍛えたアイルー達は、那月ちゃんも本気で警戒するほどガチな強さを持っていて「しっかり手綱を握っているよ」と俺に念を押してくるくらいだ。

ま、マタタビで無力化できるとわかって、アイランドガードに何匹か本気でスカウトしていただ。

「おっと、もうこんな時間か。叶瀬、伯父さんにお土産もっていけ、それとプリンも入れてやるから、明日二人で食べる」

「あ、ありがとうございま、した」

俺は叶瀬を送る車を手配して、迎いの車が到着した後は全員で叶瀬を見送り、姫終に家の鍵を渡して家に返した。

そして、夕食の片付けが終わった後、凧沙がりビングのソファで寛いでいるを確認し

て自室へ戻る。

所謂アイテムボックスから、錬金術で作った覗き防止と盗聴防止の道具を使い、更に専用の通信道具で部下の一人に連絡を取る。

「どうだ？ あ、来たのか。では、手筈通りに頼む。ああ、無線封鎖を。渡した道具を使えば大丈夫なはずだ。

それと、くれぐれも戦闘はしないように、人形の方はB班がやる。だから、気を付けて監視してくれ。アスタルテの眷獣は厄介だからな。……ああ、後は頼んだぞ、ジリオラ」

俺は通信を切って、覗きと盗聴防止のアイテムを手早くアイテムボックスに入れた。

さあ、ドンドン、原作ブレイクしていくぞ！ と気合を入れた。

翌日、監視を邪魔されたせいや姫柊が拗ねていたが、些細なことだ。

というか、もう監視してたのかよ！

真面目すぎるだろ。

不機嫌な姫柇とペット連れの浅葱

姫柇の歓迎会をした翌朝、俺と姫柇は二人で学校へ向かっていた。

姫柇が絃神島へ到着した昨日に始業式があったが、姫柇が絃神島に着いたのは午後で残念ながら新しいクラスメイト達とは顔を合わせてない。

今日が学校へ初登校だ。

本来なら夏休み中に手続きを終える筈だったが、色々調整に時間がかかったようだ。

具体的な原因は、もう一人の監視役候補の方が都合が良いと考えた政治家がごねたからだ。

そういえばそんな奴いたな、ともう一人の監視役候補と電話して思い出した。

「今日も良い天気だ」

「……………そうですね」

俺の言葉に、隣から相づちが返される。

できれば風沙が居てほしかったが、風沙はチア部の朝練で朝早くに家を出た。

二人で仲良く学校へ登校したいと思っていたのだが、姫柇が不機嫌だ。

その理由は分かっている。昨日の夜、俺が一時的にとはいえ、監視の式神からの映像と音を遮断したからだ。

姫終は俺の部屋へ乗り込むか悩んだそうだ。

けれど、乗り込むと決める前に式神からの映像と音が回復したので俺の部屋へ乗り込むのは止めたらしい。

ま、夜に俺の部屋に姫終が乗り込んできたら、ちよつとお仕置きするつもりだった。

お仕置きの内容？ 子供の躰と言えば、お尻ペンペンだろう。

中学生にするお仕置きとしてどうかと思うけれど、夜に部屋に乗り込まれるのは流石に困る。

いくら本編のメインヒロインで会っても、出会ったばかりの女の子だ。

あまり良い気分ではない。あとは健全な男子高校生としても、遠慮してほしい。

「姫終、ずっとその調子でいるのか？」

「……………」

「機嫌を直してくれないか？ 俺だって、友人と電話する時は、女の子に聞かれたくない

話くらいはするさ」

「……………聞かれたくない話？」

「かわいい女の子について」

あ、ゴミを見るような目で姫柇が俺を見はじめた。

我々の業界ではご褒美です。もっと見て、蔑んだ目で俺を見て！ とか言つてやろうかと思つたけど、流石に止めておいた。

女子中学生には刺激が強いだらう。

それにやり過ぎると冗談抜きで嫌われる。それは避けたい。いろいろな意味で。

原作をブレイクしていくにしても、ラスボスとの戦いのために眷獣の掌握は必須だ。

遊戯王の「トゥーンはトゥーンでしか倒せない」みたいに、ラスボスは眷獣でしか倒せない。とか言われても困るし。

「最低ですね」

「かわいい女の子について話してただけなのに、酷くない？」

即座に切り捨てられた。男子高校生の大半はこんな感じだよ？

「………具体的な話をしていたんですか？」

「そうだな、赤系のパステルカラーのパンチラが素敵だという話だな」

俺がそういった瞬間、姫柇はバツと両手で、スカートを押さえながら俺から距離を取る。

姫柇のその行動で、俺は姫柇が今日履いているパンツの色を察した。

「い、いつの間に見たんですか?!」

「いや、見てないぞ」

「う、嘘です。でなければ、分かるはずが」

俺はどうしたものか。と考えていると、居心地が悪くなったのか、姫柧はスカートを押さえながら歩きだした。

まだまだ、俺への姫柧の好感度は低いなと思った。

それと、原作では今日が姫柧がナンパされて暴れる日だと分かった。

ただ、姫柧の合流は原作とは違う。

街の監視をしつかりやりながら、原作はやはり目安程度に考えよう。

「姫柧、あまり先に行くな。通勤時間帯でも女子中学生が一人で歩いていると、面倒事に巻き込まれるぞ」

「.....」

俺が歩く速度を上げて姫柧に追い付くと、姫柧は立ち止まって、俺の見ながらこう言った。

「先輩が先に階段を登って下さい」

「あぁー、うん分かった.....」

姫柧が立ち止まった理由は、ちょうど駅への階段の前だったからのようだ。

姫柧からの俺への信頼度はかなり下がっているようだ。

仕方がない。あとで姫終には、原作が始まったときのためにと集めておいたねこまたんグッズをちよつとずつプレゼントしていこう。

あ、でも、まずは原作通りにクレイニングゲームのねこまたんのぬいぐるみからにするか。

「だが姫終、先に言っておくが」

「何でしょうか？」

「パンツ見られたくないなら、その可愛いスカートをもう少し長くしなさい」

俺が父親のような視線を姫終に送りながらそう言うのと、姫終は困った顔をしながら俺に言った。

「このスカートは、この長さが最大値です」

「……え？」

俺はその言葉を聞いて、空を仰いだ。

今日もジリジリと太陽がうっとおしいな。

「今日中に学園の偉い奴等にクレーム入れてスカート長くさせるから安心しろ」

「い、いえ、そこまでしなくていいですから」

「いや、気にするな。道理でウチの学校の女子生徒はスカートが長い奴が一人もいないと思つたら、あのスケベ親父共が!!」

風沙のスカートも短いから何度か注意しようかと思つたものだ。女の子のオシャレ

に口を出すのはどうなんだろうと思って、遠慮していたのが間違いだった。

一時期、盗撮被害が多いと騒ぎになった。何故その時にスカートの丈の長さを増やさなかったのか、訳が分からない。

ああ、ダメだ。ちよと魔力が溢れ出そう。

「あ、あの先輩、気をつければ大丈夫ですから、クレームは入れなくても」

「止めるな姫終！」

姫終が少し慌てた感じで、俺の右手を掴んでくるが、今それどころではない。

姫終と風沙のパンツがこれからも危機に晒される。

そう思ったら、俺は獣のような唸り声を出しながらこう叫んでいた。

「ここから先は、第四真祖の戦争だ」

「いいえ、先輩。そのセリフはここで言うべきセリフではない気がします！」

姫終が必死で俺を止めるために腕に抱き付いてきた。

おお、良い匂いと感触だ。

一瞬とはいえ怒りが収まったが、どの道スカートの丈はもつと長くしないと危ない。

というわけで、俺は気を取り直して歩き出す。

「待ってろよ。スケベ親父共」

「きゃっ、先輩待ってください。て、先輩の体から膨大な魔力と雷光が?! こ、これが第

四真祖の力。回りに人がいないからって、こ、こんなところで、第四真祖の力を出さないでください先輩いっつ!!」

このあと、スケベオヤジ共の所へ殴り込みに行こうとしたら、ちょうど通りかかった浅葱が騒いでいる俺を見つけて、俺がプレゼントしたメダロットのメタビーにリボルバーで俺の頭部を狙撃させ、その衝クリティカルヒット撃で俺は正気に戻った。

それから、俺と姫終、浅葱の三人で学校へ登校することになり、その道中で俺は姫終を紹介した。

原作だと浅葱の姫終への視線は最初あまりよくないが、今のところは普通に感じる。

ただ、浅葱の俺への視線は、どこか冷たいものがあつた。

「聖女に続けてまた年下。やっぱり古城ってロリコンなのかな?」

俺が定期で改札に入った時、周りの雑音で聞こえなかったが、浅葱が何か小声で呟いていたのは分かった。

うん、ある程度予想はついているから言っておくけど、俺はロリコンではありません。転生して、魂の年齢はオッサンだけど、違うからね!

お茶会（微修正）

「古城って、顔が広いわよね」

「ん、なんだよ。突然」

学校の正門で姫終と別れた後、俺と浅葱の二人で廊下を歩いていると浅葱がそんなことを言い出した。

「姫終って子のことよ。古城って色々な知り合いがいるでしょう？ やっぱり、社長だから人脈作っているのかしら」

「そんな大層なことをしているわけではないよ。それに俺の場合は社長だけど、実質副社長が経営の中心だ。俺は研究者兼現場監督かな」

「会社乗っ取られないの？」

「乗っ取れると思うか？」

「あー、無理ね。物理的な意味で」

浅葱は微妙に勘違いしているが、ウチの会社の副社長は矢瀬のお兄さんの紹介で雇った人物だ。

彼は俺が第四真祖だと知っている上に、父親が重い病で危なかったところを俺に助け

られている。そんなこともあって、彼の性格上裏切る可能性はかなり低い。

なにより、第四真祖になる前からの付き合いであり、第四真祖になっても「ああ、そうですね」の一言で終わらせるくらいには親しい間柄だ。

「しかし、今日も日差しが強いな」

「そうね、古城に貰ったアミュレットがなかったらもつと日焼けに気を付けないといけなかったわね」

もう少しで教室だったのだが、日差しが強く思わず眉を潜めてしまう俺。

浅葱は俺が作った吸血鬼用の対太陽光アミュレットを撫でる。

このアミュレット、実はウチの会社で販売しようとしたのだが、高性能すぎて那月ちゃんからストツプがかかった。

一般的な平和主義な吸血鬼の為に販売しなかったが、安全を考慮した結果販売を断念した。

正直、第四真祖になってから今まで、デメリットの方が多い。

その一つは体が本能的に夜型になってしまったことだ。

俺は今一応は農家だ。

早寝早起きが基本だが、夜はなかなか寝付けない。

更にチート能力のおかげで、状態異常には直ぐに耐性がついてしまう。

不眠症の為に睡眠薬を服用したら、効果があつたのは一度だけで、それ以降は効果がなかった。

霧になれない（攻撃回避、高速移動など）。吸血鬼系の弱点が出来た。日差しに弱い。戦いの気配を感じるとハッスルする眷獣（制御不可）達。

アヴローラが目覚めたら、これを返せないかな。

つて、ああ、ごめん嘘です。暴れようとしなくてくれ！

「古城？」

「いや、何でもない」

「そう？ やっぱり日差しが強いみたいね。汗かいているわ」

「ああ、そうだな」

俺はイベントリからハンカチを取り出して、汗を拭つた。

よし、眷獣達も落ち着いたし、教室へ行こう。

「おはようー」

「おはよーつす」

二人で教室に入り、教室の入り口で挨拶すると「おはよう、浅葱。社長」「社長おいーつす」「社長さん、おはよう」と挨拶を返された。

ああ、すっかり社長扱いだ。ちよつと寂しい。

俺は軽く個別に挨拶を返しながら、教室の一番後ろの窓際の席に座り、浅葱は俺の前の席に座った。

「おはようさん、お二人さん。今日も仲良くご登校だな」

「おつす、矢瀬」

「はあー、おはよう。基樹」

「なんだよう、浅葱。二人の時間を邪魔されたからって、溜め息つくなよ」

「なつ、そんなんじゃないわよ！」

早速二人のじゃれあいが始まったので、俺はしばらく見守っていると、矢瀬が俺に話を振ってきた。

「あ、そういやあ、中等部に転校生がきたらしいぞ」

「あ、その子は俺が面倒を見ることになった子だ。知り合いの攻魔官のお弟子さんなんだよ」

「へー、そうなんだ。可愛いのか？」

「ちよつかいかけの奴は俺がおろし金で擦り下ろすつもりだ」

「怖ええよ、お前！」

イベントリからおろし金を取り出して見せたが、流石にここ数年みんなの前でどこからともなく本とか紅茶とかを取り出していたため、もう驚かれなくなつた。

みんなは俺が那月ちゃんの弟子みたいなものだと思ってるので、空間制御の術式で物を取り出していると思ってるようだ。

最初はみんな驚いていたが、今では俺ならそれくらいするだろう。という空気になっている。

中等部時代、冬に教室の後ろで畳とコタツ、ストーブを取り出して、みんなに感謝されていた。

ま、そのままコタツに入ったまま授業を受けようとして当時の担任に頭を叩かれたりもしたが、そういう非常識なことを、さも当然のように、普通に行ってきた結果。

俺が少し奇行に走っても、怪しまれない土台を作った。

いつか俺が第四真祖だと分かったときに、みんなを必要以上に怖がらせないための布石だ。

うまくいくと良いのだが。

「こっちは、預かっている側だ。それくらいするさ」

「おいおい、やり過ぎるなよ。また凧沙ちゃんに口を利いてもらえなくなるぞ」

「うぐつ、止める。思い出させるな。あの地獄の日々を」

第四真祖なって、一月くらい経ったときだ。

凧沙に告白した男子がいた。

偶然、その場を目撃した俺はシスコンを暴走させ、波瀾院フェスタ用に作っていた、リアルなネメシススーツ（バイオハザード3の追跡者）の格好に着替え、風沙に告白した男子生徒を追い回した。

怒りのままだ。

その結果、あまりにもリアルに作り過ぎたため、学校の外へ逃げた男子生徒を追いかけている俺の姿を見た街の人たちが、アイランド・ガードに「生物兵器みたいなのが人を襲っている」と通報してしまった。

俺も途中でヤバイと思ったが、全力でアイランド・ガードと戦うのはヤバイと思って、肉弾戦のみでアイランド・ガードと派手に戦った。

途中で那月ちゃんが参戦してきたので、全力で逃げて最後はどこでもドアで逃げ切った。

那月ちゃんには関与を疑われたが（魔力は使っていないので、怪しまれただけ）、シラをきり通した。

それしたら、数日後に俺が暴れたせいで怪しい企業に抜き打ちのチェックが行われ、ある製薬会社が本当にウイルス流失をやらかしていたため、那月ちゃんから俺は完全には疑われずにすんだ。

ま、犯人だけ。

だが、ホツしたのもつかの間、風沙には俺だと動きでバレていて、二週間近く俺を無視。更に口をきいてくれなくて、ガチ泣きした。

あそこまで、風沙が怒ったのは初めてで、俺はひたすらオロオロするだけだった。

「とりあえず、矢瀬の方で後輩たちに姫終にちよつかいをかけたら危ないと噂を流しておいてくれ」

「あー、分かった。けど、大丈夫じゃないか？ 聖女ちゃんファンクラブや浅葱ファンクラブみたいなのが、すぐに出来るだろう」

「ああ、あれは酷い事件だったね」
「ちよ、止めてよ。その名前を出さないでくれる」

矢瀬が浅葱の古傷を軽く抉ると即座に顔をしかめる浅葱。

中学時代、俺は浅葱と賭けをして勝ち、文化祭で浅葱にボーイツシユなアイドル風に歌わせたことがあった。

バンドは俺と矢瀬など、同じクラスの男子達だ。

ノリと勢いだけで始めたが、全員かなり楽しんで練習をして好評だった。

その結果、浅葱にファンクラブが出来た。

ちなみに、現在も浅葱ファンクラブは活動している。

あ、そろそろホームルームだ。

「そろそろ那月ちゃんが来るから席に戻れ」

「お、マジか。じゃあな古城、浅葱」

那月ちゃんが来たのはそれからすぐだった。

ついに始まった。今までみたいな準備期間ではない。

原作が本格的に動き出したのだ。

「全員、席に着いているな」

担任の教師、南宮那月。もとい、那月ちゃんが教室に入ってくる。

どうみても小学生高学年、もしくは中学一年生の容姿だ。

「那月ちゃん、おはよう！」

「っ、教師をちゃん付けで呼ぶな、馬鹿者が」

「おっと」

声をかけると俺と那月ちゃんの目が合う。少しだけ頬を赤らめつつ、那月ちゃんは即座に空間制御の術式を使い、右手で持っていた扇で俺の後頭部を狙う。

しかし、俺はその動きを予測していたので、しっかりと教科書でガードする。

「ふ、ふん。出席を取るぞ」

俺に一撃を入れられずに、ちよつと不機嫌モードで出席を取り始める那月ちゃん。

ふと、前の席から視線を感じたので目を向けると浅葱が面白く無さそうな顔をしてい

た。

「ロリコン」

「待て、なんでそんな罵倒をされないといけない」

「ふん！」

浅葱の不機嫌は昼休み、俺が浅葱のために作ってきた特製弁当を食べるまで続いた。

☆ ☆ ☆ ☆

放課後になった。

俺は那月ちゃんの執務室へ補習（素で英語が苦手）を受けに行く前に、原作のことをまとめたノートをチェックしていた。

イベントトリ、アイテムボックスと呼ばれるチート能力から取り出したこの一冊の古びたノートは、俺の意識がハッキリとなり、文字を書けるようになって直ぐに書き留めたメモやノートを編集したものだ。

時間と共に原作の細かい知識がなくなることとを恐れた俺は小さい頃から必死に原作の知識をまとめたのだ。

「うん？ 姫終が合流するの夏休みの最後の三日間くらいの時期じゃん」

あつれー？ とは思ったが、なってしまったのしようがない。

ああ、そうか。俺が滅教師を二度とシヤバに戻さないようにするために、色々と工作したから、その影響もあつて、姫終の合流が遅れたのか。

ま、いいや。大事なのはこれからだ。

「結果的に、姫終も滅教師も同時期に来たから問題ない」

これでどちらか片方だけしか来なかつたら目も当てられない。

危険人物を排除するチャンスがなくなるし、仲良くなるチャンスや血を吸うチャンスもなくなる。

「ま、今回は修正力に感謝かな」

修正力は厄介だ。

とっさの出来事が起こった時、普段なら冷静に対処できるタイミングでも、原作と似たような行動をとってしまう。

修正力の影響で、俺は第四真祖になってしまったし。

ま、今度こそ好きにやらせてもらおうけど。

「那月ちゃん、いるか？」

「こ、古城か？ ああ、いるぞ。つて、だから教師にちゃんづけをするな！」

那月ちゃんの執務室にノックもせずに入る。

本来なら、そんなことをすれば那月ちゃんからお仕置きされてしまうが、この島に来てから頑張つて那月ちゃんにプレゼント攻勢をした結果、これくらいは大丈夫な間柄になった。

「おおつ、やつぱりその格好似合っているよ」

「お、お世辞は言うな。この年でこんな格好は似合わないことは分かっている」

執務室へ入ると、俺は素早くドアを閉める。

出迎えてくれた那月ちゃんはゴスロリ姿ではなかった。

そう、俺はこの数年間で、本来なら殺されてもおかしくないようなお願いを聞いてもらえるくらい、那月ちゃんと仲良くなった。

……好感度の計算ミスったことに気づいたときは血の気が引いたけど、今の那月ちゃんの俺への好感度はそれくらい高い。

うん、原作開始から那月ちゃんが俺にデレている状態だ。

「そんなことないよ。すごく似合っているよ。そのプラウダ高校、カチューシャのコスプレ。すごく可愛いよ」

「く、大人に可愛いなどと言うな、馬鹿者が……」

那月ちゃんは、気恥ずかしそうに俺から顔を背けた。

そんな那月ちゃんを見て、俺は那月ちゃんが探していた茶葉をイベントリから取り出して那月ちゃんに手渡した。

「はい、これ欲しがっていた茶葉ね」

「これは、良く手に入ったな」

「知り合いの料理人の方にもちよつとね」

なぜ、那月ちゃんがコスプレをしているか疑問に思うだろう。

那月ちゃんは意外とサブカルチャー寛容だった。

とある日、俺は那月ちゃんに用があつて執務室にきたが、少し到着が遅れるというメモを見つけたので、暇潰しにこの世界にあるゴスロリ系漫画を読んで待っていた。そこに帰ってきた那月ちゃんが、その本に興味を持ったのだ。

そこから、好感度をあげながらオタに目覚めさせ、那月ちゃんの前でコスプレの話題を出す度に「那月ちゃんはコスプレが似合う」と半ば洗脳のように言い続け、満更でもなくなつたタイミミングで頼んだのだ。最初は土下座して頼んだ。

最初はドン引きしていたが、それから徐々に抵抗感をなくさせて、今ではゴスロリキアラ以外のコスプレもするようになった。

ただ、流石にイベントなどには参加せず、二人きりの時に着て見せてくれるだけだ。

機嫌が良いとポーズをとってセリフを言ってくれたりもする。

「ところで、古城。今この部屋に入ってくる前に変な虫が飛んでいたから叩き落としたが、あれはなんだ？」

「あ、それについて伝えておくことがあるんだ」

「話せ、今度は何をした」

那月ちゃんは少し疲れた表情で、俺に自分が座っているソファの向かい側にあるソファに座るように促す。

相変わらず、豪華なソファだな。と思いながら、

俺はある程度事情を知っているであろう那月ちゃんに、改めて現状を説明した。

「というわけで、第四真祖を監視するために獅子王機関から姫終雪菜という少女が監視役として送られてきました。それと三聖が悪のりして、姫終雪菜は俺の婚約者候補となってます」

俺がぎっくり説明すると、那月ちゃんの表情が一変した。

「……………」

「怖っ！那月ちゃん、止めて。そのおめめメツチャ怖いから！」

「あの小娘共、随分と面白いことを言ったな」（●）（●）

「落ち着いて、那月ちゃん。まずはハイライトを元に戻して！」

俺の言葉に那月ちゃんは既に入れていた紅茶を一口飲み、目を閉じてゆつくりと深呼吸をしてから目を開いた。

良かった。ハイライトが仕事をしている。

「しかし、嫌な名前を聞いた」

「あー、やっぱり？ あそこって那月ちゃんの商売敵だったね」

「……その商売敵と教え子の仲が良いのも問題かと思っている。教師として多少強引にでも距離をとらせるべきかな？」

「ごめんなさい。簀巻きは嫌です。だから、その手錠と鎖を仕舞ってください！」

俺が慌てて降参のポーズを取ると、那月ちゃんは溜め息をつけて俺に真面目な表情でこう言った。

「奴等は第四真祖でも、容赦なく殺しに来るぞ」

「あ、それは大丈夫。いざとなったら、獅子王機関の幹部達の割と洒落にならない弱味を盾にしながら全力で戦うから」

俺の言葉に、那月ちゃんは滅多に見れない絶句した表情を俺に見せてくれた。

うん、可愛いね。

那月ちゃんは苦い顔をしながら、俺に問いかけてきた。

「古城、貴様。何をした？」

「シヨタコンお姉さんが、シヨタ達と健全に戯れている映像とかを持っているだけです。ただ、お姉さんの表情がヤバいですけど」

「分かった。もう良いそれ以上は言うな」

那月ちゃんは、疲れた表情でそう言った。

弱味を握るくらい大したことはない。過去にやらかしたことを考えればおとなしい方だ。

「まあ、良い。お前の現状は分かった。とりあえず、お前の分の紅茶を入れてやる。それが終わったら補習を始めるぞ。まったく、経営している会社が順調に業績を伸ばしているのだから、成績の方も伸ばしてほしいものだな」

「あははは、それについては本当にごめん」

「ま、サボりではなく、本当に分からないのだから仕方がない。最後まで面倒を見てやる。感謝しろ」

那月ちゃんの声色はどこか嬉そうだったけど、俺はそれには触れない。

二人きりの時間だしね。

「ありがとう、那月ちゃん」

「だから、教師をちゃん付けで呼ぶな」

「あだっ」

那月ちゃんに叩かれた頭をさする。

ちよつと頬が赤い那月ちゃん。これは遠回しにプライベートの時は那月ちゃんと呼んでも良いということなのではないか？ と解釈しておく。

それと、前に補習中は教師として敬え、と言っていた。

つまり、今は教師として那月ちゃんは振る舞わないといけない。

だけど、那月ちゃん。

今、プラウダ高校の制服のままだけど、着替えなくて良いの？

そう思ったけど、後で写真を撮るためにあえて言わないで聞いた。

ちなみに、姫柩は今、風沙と叶瀬の三人で日曜雑貨を買いに行っている。

当人は近くで俺の監視をしたかっただろうけれど、俺が先手を打って風沙に「たぶん、こつちに来たばかりで色々足りないはずだ。けど、姫柩の性格上俺達に遠慮して言い出し辛いと思うから、少し強引にでも街を案内してやれ」と朝練に行く風沙に言っておいたのだ。

そして、放課後になり、凧沙からメールで「三人で買い物に行つてきます」と連絡が来たので、しばらくは姫終は動けないだろう。

それとアイルー達を四人の護衛につけているので、問題は起こらないはずだ。

「あ、ハハハは？」

「ん？　そこはだな」

それから、俺は約一時間。

那月ちゃんと二人きりで、補習を受けた。

「あ、そうだ。ケーキ買ってきたんだけど、食べる？」

「………終わったらな」

「OK、分かった」

補習より、その後のケーキを食べながら二人きりで話している時間の方が多かつたよ
うな気がする。

あ、それと「今はカチューシャなんだから、あーんをされないと」「い、いや、しかし
だな」「ほら、カチューシャ、あーんですよ」という具合に、照れながら好物のシヨート
ケーキを食べる那月ちゃんは可愛かつたとだけ記しておく。

ドロスへ散歩（微修正）

「姫終、いつまでむくれているんだ？」

「むくれてません」

那月ちゃんのお茶会が終わった後、俺は姫終と合流して迎えの車に乗り、経営している自身の会社、暁カンパニーの本社ビルへ向かった。

俺の経営している会社は、異常な速度で育つ作物と子供を産んでいないのに大量のミルクが取れる牛、鶏などの畜産物が主力商品だ。

ただ、尋常ではない収穫量なので、怪しまれない程度に出荷数は押さえている。

それでも、敷地面積、飼育頭数などからみてかなり多いので（俺が品種改良したということになっている）、種や牛、鶏を求めて、日夜産業スパイとのバトルが起こっている。

「そういうえば、今から空中艦ドロスへ行くらしいですけど、今から空港に行くとなると時間か」

「移動の時間は気にしなくて良いよ」

「それは、どういう？」

社長室に入ると、直ぐに社長室の右手側にある扉を開ける。

この扉は許可された者しか開けられない特殊な扉だ。

仮に壁を破壊しても、隣の部屋には行けないようになってる。

物理的にはではなく、魔術・錬金術で空間を繋いでいるからだ。

「こ、これはもしかして、ポータルゲート……ですか？」

「一目でよく分かったね」

「え、ええ。専門ではありませんが、習いました」

姫終の目の前にあるのは、俺が作ったオリジナルのポータルゲートだ。

アトリエシリーズなどの力をミックスして作られているこのポータルゲートは、古の

大錬金術師ニーナ・アデラードに「全世界の錬金術に喧嘩売ってる」と言われるくらい、

訳が分からない物らしい。

少なくとも、丸ごと盗まれても複製されることはないそうだ。

「ま、これは姫終が教わったモノとは別モノと考えてくれ」

「まさか、これは先輩のオリジナルですか?!」

「ああ、お陰で稀代の錬金術なんて言われたりもしているな。たまに弟子入り希望者も

来る」

「凄いですね。起動しているポータルゲートはほとんど無いのに」

「ああ、機能が停止しているのも合わせて世界に十もないモノだから、色々あつて個人で使う分しか日本政府に販売が認められなかった」

このポータルゲートを販売しようとした時、まだ俺は第四真相ではなかったため、日本政府は俺を本気で囲い込もうとした。

過激な輩は即座にどこまでドアの奇襲の餌食にしたお陰で、日本政府は囲い込みを断念してポータルゲートを売ってほしいと言ってきた。

空中艦ドロスもこの時既に完成し、会社も動き始め、最初の交渉役の人物の人柄もあり矢瀬のお兄さんなどと大まかな値段を決めていたのだが、次に交渉役が最悪だった。

母国だし、最初の交渉、販売は日本にしようとしていたのだが、日本政府が提示してきたポータルゲートの値段がゴミだった。

日本は本当にケチだな。と思ってしまうた。ま、中学生だからなめていた部分もあったのだろう。

当然断り、他の国との交渉を始めた直後に、日本政府は俺の弱点をついてきた。皇室、皇太子殿下が、お忍びで俺を訪ねてきたのだ。

もうね、胃に穴が空くかと思った。

そこまで？と思うかもしれないけど、前世の育った環境が原因だ。

両親が仕事大好き人間で、俺は祖父母に預けられることが多かった。

で、祖父母は皇室への畏敬の念が強い人達で、更に成人した後、ブラック企業などが世間で騒がれた時に天皇陛下下のブラック企業も真つ青なスケジュールを知って、皇室の株価はガン上がりした。

更にこの世界はオカルトがある。皇室は地脈、龍脈か。

皇室は日本の龍脈の流れの監視などもしている。

そういった部分でも、俺はこの世界でも皇室を尊敬しているし、皇室の方々に頼みごとをされた場合、余程のことがない限りお願いを聞いてしまうだろう。

「やんごとなきお方の頼みでは、断れないさ」

「どういふことですか？」

「テロとか戦争で利用されないように、販売を自粛してくれと頼まれたんだ」

殿下は言わされている感が凄かったけどな。

俺は皇室に旨い野菜や果物を定期的に献上していた為、かなり好感度が高い。

というか、この世界の皇室は前世より政治家達にとって利用価値が高い。

純粹に敬われるのはやはり嬉しいようで、仲良くしようと言われたりもした。

リップサービスかと思ったらガチだったし。

献上は個人で上げている訳でないので牧場物語の力は発揮していないが、それでも俺に色々言うのは心苦しかったみたいでお茶会に誘われたが、全力で断った。

恐れ多い上に島から離れる訳にはいかなかったし。

後日、俺はポータルゲート販売中止を発表。

ブーイングがかなり起こったが、直ぐに内閣閣僚全員の横面が三倍くらいに不自然に腫れているのが確認されると誰も文句は言わなくなった。

俺が念入り話し合いをした結果だ。

それから日本政府からの干渉は減った。

現在の内閣閣僚との関係は普通だ。

ただ、俺が第四真相になった。と情報が日本政府に入った時は阿鼻叫喚だったらしい。

にもかかわらず、未だにちよっかいかけてくるのがいること考えると人間の欲深さは凄いと思うよ。

「じゃあ、移動するから魔法陣の上に乗ってくれ」

「分かりました。先輩」

転移は一瞬。瞬きしたらSF映画にできそうな雰囲気、真っ白な部屋に俺と姫終は立っていた。

姫終はあまり転移の経験が無いようで、部屋を見渡しながら自分の身体もチェックしていた。

「こつちだ。ついて来てくれ」

「分かりました」

空中艦ドロスは機動戦士ガンダムに登場した宇宙空母ドロスを元に改造した船だ。

全長492mの巨大な物体が空に浮いているのは、当時はかなり騒がれた。

現在は四隻の空中艦が島の南西五キロの地点で浮いていて、各艦には移動用のポータルゲートが設置されている。

「部屋を出て右側の通路が他の艦へ移動する為のポータルゲートが設置されている部屋に続いている。左が農業エリアだ」

「農業エリアですか？」

「そうだ、この艦は大まかに四つのエリアに別れている」

俺は姫終を連れて農業エリアへ歩きだす。

「農業または畜産エリア、収穫した物保存する倉庫エリア、従業員が寝泊まりする居住エリア、農機具を入れる格納庫だ」

「やっぱり、家畜の出産などがあると泊まりがけなんですか？」

「ああ、後はちよつと事情がある奴らが寝泊まりしてるな」

軽く説明をしているうちに、農業エリアの入り口に到着した。

「広いですね。それに空からの光が」

「強化アクリル板で太陽の光を取り入れてるんだ。三層構造でかなり頑丈だから、今までにあそこから侵入されたことはないのが自慢だな」

姫終がドーム状の天井を見上げていると、ガシヤン、ガシヤンという大きな音がしてきたのでその方向を見て固まった。

「せ、先輩、あれは何ですか?!」

目に飛び込んできた物に驚く姫終に、俺はあれがなんなのか教えてあげた。

「農業用の人型ロボットだよ。名前はザクI、通称旧ザク。キャタピラのはザクタンクだ」

「……」

驚き固まる姫終。この世界は自動人形やホムンクルスはあるが、巨大ロボットはない。

前世にあったアニメ作品もガンダムなど大半が似た別物だった。

ガルパンなどはあつたりするから不思議だ。

「せ、先輩が作ったのですか?」

「ああ、一応な」

正確には召喚だけだ。

一度ワクワクしながら動かしたが、これは数年訓練しないと動かせない代物だった。

チート能力で数時間で動かせるようになったけど、アムロの凄さが分かった。ちなみに、モビルスーツはアイルーがパイロットをしている。

コックピットは俺が作り、システム周りは浅葱が嬉々として作っていた。

俺が原因で浅葱が大分ロボ好きになっている。

後々ナラクヴェーラを魔改造しないか、少し心配だ。

「旧ザクはコンテナの運搬。ザクタンクはトラクター変わりだな。ま、そういう名目で作った」

「名目?」

「ああ、何事も備えあれば、というやつだ。空中艦は何度も襲撃されているし」

あまり、役にはたつてないけどな。

「兵器なんですか?」

「一応はな、あまり脅威には思われていないが」

この世界の魔族と一年戦争時のモビルスーツは相性が悪い。

個体にもよるがコックピットや頭部、脚部を破壊されたら詰む。

並み以上の強さを持つ眷獣を従える吸血鬼相手だと、ただのデカイのだ。

素のままでは話にならない。

素のままなら、な。

「よく今まで無事でしたね。これを作った時は先輩はまだ」

「中学生だ。というか、なりふりかまつている暇がなかった。政府要人とは肉話し合い体言語で
しつかり話し合ったよ」

生か死かの問い突きつけたら、大抵は大人しくなったけど。

強情な方には、巨人と追いかけてこしてもらった。

うん、無垢な巨人だ。

「と、書類もらう前にネコ婆とネコ嬢を紹介しようと思っただけど、取り込み中か」

「ネコ婆？　ネコ嬢？」

「ほら、あそこで大根と戦っているよ」

「え?!」

俺が指差した方に姫終が目を向けると、三十匹のアイルー達が、スーパーで売られて
いる三倍位の大きさの二足歩行の大根と戦っていた。

ネコ嬢、もといカティはアイルー達に指示を出していたが、劣勢だ。

どうやら王もといドス大根が現れて、大根達を統率しているようだ。

「うん。立て込んでいるから、後回しにしよう。行くぞ姫終」

「ええ、いいんですか、先輩!？」

大根達はどこからか、角材などを手にいれてアイルー達を押しているが、問題ない。

「そのうち援軍がくるさ、それに俺達だと大根を破壊してしまう」

「え、えつと?」

「あれ、商品だから、傷つけては駄目だ。姫終は暴れる大根を上手に捕まえられるか?」

俺の問いに困った顔をする姫終。

まあ、当たり前だな。

この世界でも、品種改良でマンドラゴラみたいな動く大根が出来るのは家だけだろう。

「三番艦は畜産をしているから、先にそつちへ行こう。家の可愛い、牛や羊に会わせてやろう」

「あ、はい」

姫終の手を引きながらその場を離れようとする、背後からカティの「ハ、じゃない、社長、覚えてろー!」と叫び声が聞こえたが聞き流した。

このあと三番艦で受付嬢から書類を受け取り、姫終と動物達（牛、馬、鶏、羊、兎、アールパカ）と戯れていると、収穫を終えてポロポロになったカティに助走を付けた口ケツ

ト頭突きを食らった。

それから、俺はカティに謝りながら姫終に彼女を紹介した。

姫終がカティからお近づきの印でネコミミカチューシャを貰い、身につけての記念撮影が始まった。

姫終はかなり恥ずかしがっていたが、面白いので茶化さず、姫終を誉めながら時間ギリギリまで撮影した。

紗矢華が来たら見せてやろう。嫉妬に狂いながらも悶絶するだろうな。

「どうだった姫終」

「え？」

「楽しかったか？」

俺の問いに少し考えて、ちよつと恥ずかしそうに姫終言った。

「はい、楽しかったです」

「今度、カボチャの収穫があるから、ちよつと手伝ってくれ」

バイト代出すから、というと姫終は「別に無くても手伝いますよ」と微笑んだ。

俺達は穏やかな気持ちで家へと帰る。

だが、姫終は知らない。

波瀾院フェスタのイベント用に品種改良されたカボチャが、収穫されまいと畑を縦横無尽に跳び跳ねることを。それらのカボチャを傷つけてはイケナイことを。大物になると五メートル位のカボチャになり、高レベル作物な為にとんでもなくガチバトルをすることになることを。

そして、

「あ、そうだ、姫終。言い忘れていたんだけど」

「はい、何ででしょうか、先輩」

「頭にネコミミ、ずっと付けっぱなしだぞ」

マンションの前に到着するまで、自分がカテイから貰ったネコミミカチューシャをずっと付けっぱなしだったということ。

動きだす

姫終のネコミミ姿が学校で話題になっていた。

うん、俺が原因だ。

「鬼だな」

「古城、アンタってば、酷いわね」

「あははは」

翌日の昼休み、俺は朝葱と矢瀬の三人で、教室で昼食を食べながら世間話をしていた。その時に話題になったのが、姫終のネコミミ姿の写真が出回っているという話だ。

一応、朝那月ちゃんが来る前にも多少話は出たのだが、時間がなかつたので流れていた。

「まったく、ネコミミカチューシャが付いているなら教えてあげなさいよ。まったく」

「俺も最初は教えようと思つたけど、姫終は生真面目だからさ。これからのことを考えて、ちよつと肩の力を抜かせるために教えなかつたんだよ」

「本人からしてみれば、黒歴史だと思つぞ古城」

今朝、学校に登校している途中、姫終がやたらと学園の生徒達に見られていた。

実は俺もちよつと不思議に思っている、矢瀬が合流。

昨日の姫終の可愛いネコミミカチューシャ姿が掲示板やSNSで話題になっていると教えてくれた。

どうやら、いつの間にか盗撮されていたらしい。

姫終が真つ赤な顔をして俺を睨み付けてきたので、「顔を真つ赤にして、本当に可愛いな姫終は」とイケメンだから許される返しを試みると、姫終はさらに顔を真つ赤にしながら「何を馬鹿なことを言っているんですか！」と怒りながら足早に学園へ向かってしまった。

俺と矢瀬は姫終の後を追いかけて、宥めながら三人で学園へ登校した。

その途中で、ネットにアップされた画像を消せないか俺と矢瀬に聞いてきたが、無理だろうと答えておいた。

ガツクリと肩を落として中等部へ向かう姫終に、ちよつと悪いことをしたなと思いつながらも、これからも色々やっていこうと心に決めた。

「そういうえびさ、古城。今度五番目の空中艦を浮かべるって、本当？」

「本当だぞ、既に島側との話はある。次は海水を真水にする浄水施設だな」

「相変わらず、とんでもない物を作るなあ。海水を真水に変える技術ってかなり大変だって聞いたことがあるぞ」

「科学だけなら、難しいぞ。オカルト技術を使っているから大分楽になる。それでも結構な技術だからな。警備のことも今から考えると頭が痛い」

「また、警備システム組む？ そろそろ新しいの作ろうか？」

「ああ、今度のは高度が低いし、注水するからその辺にも警備システムがほしいな」
「分かったわ」

「しかし、金が飛んでいく」と呟くと二人に「それ以上に特許とかで稼いでいるだろう」と言われた。

確かに、いくつかの特許は持っているし、資金の足しにもなっている。

だが、ギリ黒字といったところだ。

ドロスの建造費などが無くてこれなので、それを考えるとやはり赤字経営だ。

後、資金集めにマクロス（初代）の中につつたモンハンの集い場でクエストを受けて、モンハン世界の鉱物などを売り払っている。

植物の種は生態系への影響が高すぎるので売っていないが、モンスター素材と鉱物はなかなか良い売り上げだ。

一時期、未知の鉱物と生物の素材が市場に流れて各国が大騒ぎになったが、裏に俺がいるとわかってすぐに大人しくなった。

やはり、大半の指導者はどこでもドアからの鉄拳制裁コンボが怖いらしい。

真祖などは様子見だったが、中堅吸血鬼はちよつかいをかけてきたので光や聖属性魔法で炙つてやったら大人しくなった。

うっかり集会場で酔つた勢いのまま、ちよつかいをかけてきた中堅吸血鬼の所へ行つて「吸血鬼の丸焼き！」とか言つて封じ状態（世界樹の迷宮の技で）逃げられないようにして、ゲラゲラ笑いながら吸血鬼に制裁を加えたのは良い思い出だ。

中堅吸血鬼を助けに来た部下達がドン引きしていたけど。

「実際のところ。古城、アンタ後何隻作るつもりなの？」

「うーん、気がすむまでかな？」

「アンタねえ」

「ま、島にとっては浄水施設ができるのは良いことだと思うぞ、島の浄水施設で賄っているけれど、何かあったときのことを考えると、余剰分はほしいし」

「ま、島の人口に対してドロス級だけだと、限界があるけどな。俺だから、問題はないけど」

「アレ浮かせているだけでも結構なコストかかっているんでしよう？ 海に浮かべたら？」

「海中から侵入されそうだし」

「防犯面か。あのドロス級の技術を欲しがっている奴等が多いしな。空に浮かせたい気

持ちも分かるけども」

「二度、水深三百メートルくらい場所、とも思ったんだけど、内部からの破壊に弱いからさ。それなら空に浮かべていた方が良いと思っただよ」

「難しいなあ」

「でも、空に浮かべていても同じじゃない？」

「まあな」

それから、俺達は空中艦ドロスの警備体制と島の自給率、経済について話し合った。素人だけれど、浅葱と矢瀬は将来の島の中心人物だ。俺も素人で政治方面の才能はないが、最低限覚えておかないと困る可能性が高い。

今から島の未来について話し合うのは、意義があると思っっている。

「ま、学生の俺達がこれ以上話しても意味はないか」

「そうねえ」

「ま、時間もきたからこの辺にしよう」

昼休みの終了を知らせるチャイムがなったので、俺達は午後の授業の為に支度を始めた。

放課後、今日は補修など無いので姫終と合流して車を呼び、会社へ向かった。

それから、ずっと社長としての仕事である書類仕事を行う。

まあ、俺がやるのは書類にサインをするだけなのだが、何の書類なのか知らずにサインするのはまずいので秘書達に書類内容を読み上げてもらい、理解してから書類にサインをしている。

「しれい、じゃなかったのです。社長、次はこの書類にサインをお願いしますのです」

「ああ、分かったよ」

「……………」(◁●▷)(◁●▷)

視線が痛い。姫終が来客用のソファに座りながら、微動だにせずに俺をジッと見つめている。

まあ、あんな表情をする理由はわかっている。

「てい、社長。サインがおっそーい」

「急かすな」

「しれいか、ではありませんえしたわね。社長、今週の」

「ああ、分かっている」

「……………」(◁●▷)(◁●▷)

うん、監視対象が美少女、美女に囲まれているのだから、年頃の姫終に冷たい目で見られるのは当然のことだろう。

だから俺は冷たい視線に耐えながら仕事を続けようとしていたのだが、黒い兎のようなカチューシャをしている秘書の少女が俺の腕に抱きついた瞬間、空気が凍りついた。

ギリツと奥歯を噛み締める音とともに強まった姫終の眼力にも負けて、俺はソファに座る彼女に声をかけた。

「……姫終、言いたいことがあるなら言ってくれないか？」

「なら、言わせてもらいますが、先輩。先輩の秘書の方々は美形が沢山いらっしやいますね」

「あ、ああ。人手が足りなくてな」

「そうですか。小学生にも手伝ってもらえているんですね」

「いや、彼女達は小学生ではなくて」

「それに、その方」

「え、誰だ？」

「そのスカートの短い方です」

「私？」

「ああ、うん、なんだい？」

姫終は、速度に拘りのあるロングヘアで紺色のミニスカートを履いた子を見ながら、俺に質問をした。

「そのいやらしい制服は、先輩の趣味ですか？」

「違います」

「……………」(●) (●)

「本当だよ!!」

「いやらしいっ」

俺は即答した。だが、ダメだった。

いや、大好きだよ！ この制服大好きだよ！ 一時期、秘書の制服にしようかと真剣に考えたもの。でも、俺にベタベタする秘書達でも反対運動が起こったので断念したのだ。

ちなみに、落ち込んでいる俺を見た叶瀬がこっそり着てくれた。その時の写真は家宝としている。

すっかりむくれてしまった姫終に、どうしたものかと考えながら仕事をしていると、少し遅れてやってきた金髪のバランスのとれた重武装ボディ秘書のパンパカパーンの人柄のお陰で、機嫌がある程度回復した。

それと、それをきっかけに他の秘書達とも仲良くなった。

彼女達を召喚したきっかけは、秘書と言えば彼女達しかいない！ と考えたからなのだが、予想以上に秘書としての仕事も優秀で戦力にもなるので、本当に助かっている。

人間サイズではあり得ないほどの火力を持っているので、安心感がすごい。

「皆さん、すごく強い方達でしたね」

「ああ、さすがに気づくか」

「ええ、立ち居振舞いで」

仕事が終わる俺と姫柊が地下の駐車場へ移動中、姫柊が秘書達について聞いてきた。

「彼女達が本気で戦えば、単独でイージス艦にも勝てるよ」

「そ、それは」

「報告していいよ、こちらとしては問題ないし。まあ、戦闘は状況にもよるけれどね」

「大丈夫なんですか？」

「三聖は、ああ、またか。くらいの気分ではないかな？ 政府関係者は頭抱えるだろうけど」

「ど」

姫柊はちよつと涙目になっていた。

仕事の後は車で一緒に家に帰り、夕食を俺の家で姫柊も交えて食べることが当たり前になりつつある。

今日の夕食は凧沙が作ったオムライス（ケチャップのチキンライス）だ。

妹が作ったオムライス（お兄ちゃん大好き。と書かせようとしてキモがられた）を「美味い、美味しい」といいながら食べると凧沙は「古城くんはそれしか言わないから、雪菜ちゃんは遠慮なく味の感想教えてね」と兄を無視して姫終と和気あいあいといていた。

その結果、明日の夕食は姫終と凧沙が作ることになった。

夕食後に十五分くらい凧沙と姫終は話していたようだが、色々としなくてはならないことがあるので姫終は家に帰った。

そして、姫終が帰ってちよつと時間が過ぎた頃に、俺のスマホにジリオラから連絡が入った。

どうやら殲教師が旧き世代の吸血鬼を襲撃するようだ。

ついに原作の戦闘イベントだ、と俺は気合いを入れた。

クレーンゲーム

「先輩、こんな時間にどこへ行くんですか？」

「姫柊か。今夜はちよつと特殊な調査をするから、今のうちに夜食の買い物に行つておこうかと思つてな。時々ジャンキーな物が食べたくなるんだよ」

俺が家から出ると直ぐに姫柊が隣の家から出て来る。

姫柊は原作通りシャワー中だったようで、かなり水分多めだ。

セーラー服を着ているので、透けてしまいかねない危ない感じだ。

でも、俺はそれをスルーして姫柊について来るか？ と問いかける。

「行きます。でも、特殊な調査とは？」

「鍊金釜は見せたよな？」

「はい、あの非常識の塊ですね」

「あの釜を使つて、ちよつと作りたいものがあつてな。あ、秘術関連だから、流石に調査の見学は駄目だぞ。一応、作る時は声かける。いきなり監視が出来なくなることはないから安心しろ」

初日みたいいきなり監視が出来なくなると、姫柊が不機嫌になる可能性があるので予

め教えておく。

少し不満げだが、錬金術の秘術を無条件で教えるとは、真面目な姫柊では言えないだろう。

「そうですか。それは仕方がないですね」

「調合する時は部屋の外で待てば良いさ。ところで、一緒にいくか？」

「勿論です。私は先輩の監視役ですから」

俺は「そっか」と呟き、姫柊と共にコンビニへ歩きだす。マンシヨンの一階のエントランスにたどり着いたところで、イベントリからバスタオルを取り出して姫柊の頭を拭いてやる。

「わっ、ちよつと、先輩何を?!」

「途中で、自分から言い出すと思っていたけど、姫柊は無防備だな」

「え?」

「姫柊の今の格好、かなりセクシーだぞ」

俺に指摘されて、姫柊は顔を真っ赤にしながら慌てて部屋に戻った。

そして戻ってきた姫柊は、俺にボソッとこう言った。

「先輩はいやらしい人です!」

「あははは、姫柊は可愛いな」

「茶化さないで下さい」

拗ねた様子の姫終の機嫌を取りながら、俺達はコンビ二へ向かう。

その途中でチェックポイントとも言える場所。

ネコマさんのクレーンゲームがあるゲームセンターの前にたどり着いた。

俺は然り気無く、クレーンゲームを見ながら姫終に聞こえるように言った。

「あ、ネコマさんだ」

「え、あ、本当です。けれど、あれは？」

「姫終はやったことがないのか？ あれはクレーンゲームというゲームで、金を入れてクレーンを操作して、景品をあつて入れると景品が貰えるんだよ」

「景品……」

「あれなら取れそうだし、やってみるか」

「え、あの先輩？」

俺は原作通り、ネコマさんを取る為にクレーンゲームに硬貨を入れた。

「あれ？」

「あ、残念です」

「まだ、4回あるから大丈夫だ」

「頑張ってください、先輩」

「おう、任せろ」

しかし、なかなか取れない。

「む、小銭が無くなつたか。ちよつと両替してくる」

「あ、あの先輩？」

俺は少し纏めて両替する。

「ぐあ、また失敗だ」

「せ、先輩？」

「あ、でも、この位置ならこつちの色のネコマたんが取れるな」

「ああ、惜しいです」

ぐつ、取れない。アームが弱い訳ではない。

ほんの少しのかけ違えだ。

「せ、先輩、流石にそろそろ」

「大丈夫、そろそろ取れるから、両替してくる！」

ここから、俺は徐々に白熱していき。

「先輩！ それ以上は駄目です！」

「いや、駄目だ、姫終！ ここで引いたら負けだ！」

「だ、だつてもう一万円も」

「問題ない！ まだ、二万円も残っているー！」

「いえ、先輩、そう言う問題では」

おつかしいなあ。何故か取れない。何故か取れない。

それから、俺は失敗を重ねていき。

「お、お客様、沢山遊んでいただきましたので、景品は差し「ちよつと、ATM行つてくる、」」

「駄目です先輩！ もう三万円も使っているじゃないですか!? 店長さんもこう言っていますし、今日のところは」

「だが！」

と、ゲームセンター前で、俺と姫柊。ゲームセンターの店長さんと話し合っていると、「おい、その馬鹿。こんな時間に何をしている?」

「あ、那月ちゃん」

「教師をちゃん付けで呼ぶな」

「あだつ」

反射的に那月ちゃんと呼ぶと、黒い扇が顔面に飛んできた。

俺が痛みで動けないうちに、姫柊が素早く事情を那月ちゃんに説明。

ゲームセンターの店長は、那月ちゃんの教師発言に首を傾げていたが、那月ちゃんが

身分証を提示したら低い腰が更に低くなった。

冷静に考えると、ゲームセンターの店長的には肝が冷えただろう。

補導されるギリギリで、クレーンゲームで三万円も使わせている。

クレームを入れられると結構まずい。

俺が下手なだけが、三万円も使わないと景品が取れない。みたいな噂が流されると

ゲームセンターとしてはかなり困るだろう。

結局、クレーンゲームはここで終了。

ネコマたん（全三種類）は、ゲームセンターの店長さんから貰った。

「馬鹿な上にアホだな」

「そ、そう言わないでくれよ。那月ちゃん。結果的に三種類全部手に入ったんだから、

——あ痛っ!!」

「教師をちゃん付けで呼ぶな！ クレーンゲームの景品一つに一万円か、稼いでいるとはいえ無駄遣いするな馬鹿たれ」

扇で脇腹を小突かれた。地味に痛い。

「まあ、流石に今回は反省しているよ。あ、姫柊」

「は、は、は」

「その三匹大事にしてくれよ」

「も、もちろんです！ 大事にします」

那月ちゃんのおかげで、ネコマタンが三匹も手に入った。

那月ちゃんにもお礼に一つあげようとしたのだが、「趣味ではない」とやんわり断られたのでネコマタン三匹は姫終のものになった。

「お前達、早く帰れ。古城は本当に無駄遣いするなよ」

「ああ、分かっている。それと明日改めて時間をくれ。姫終のことも紹介したい」

「……分かった」(●●)

那月ちゃん、おめめ怖いから止めて。

嫉妬してくれるのは嬉しいけど。

俺達はまだそう言う関係ではないし、姫終には(まだ)やましいことはしてないから

ね!?

「お互いのことは知っているだろうけど、今後のためにな」

これから起こる事件のことを考えれば、顔合わせは必須だ。

「明日の放課後、私の執務室へ来い」

那月ちゃんはそう言うとその場を去り、俺達はコンビニへ向かった。

コンビニに入るとまずはATMで金を下ろす。

それから、唐揚げや姫終が食べたことのないお菓子などを購入。

風沙や叶瀬にも何か買おうか迷ったが、流石に散財した直後なので自重した。

コンビニでの買い物を終えそこから出た俺は、スマホで時間を確認する。

すると俺が思っていたよりも、多くの時間が経っていた。

おかしい、襲撃イベントはまだか？ そう思いながら俺は歩き出す。

うーん、事が起きるまで少し遠回りするか。

そう考えながら、事が起こった時のために姫終が持っているネコマたんの入った袋を預かることにする。

「あ、姫終。ネコマたんの袋落として汚すのもアレだし、家まで俺のイベントりにいれるぞ」

「あ、ありがとうございます。先輩」

俺がコンビニの袋をイベントリに入れながらそう言うと、姫終は素直にネコマたんが入った袋を俺に渡してくる。

俺がネコマたんの袋をイベントリに入れた直後、爆発音と共に地面が盛大に揺れた。

「な、これは!?!」

姫終の驚く声を聞きながら、更に連続して聞こえてくる爆発音と地面の揺れを感じ

る。

俺は表情が変わった姫終の横顔を眺めながら、心の中でようやくお出ましか。クソ坊主！ と呟いた。

お説教

そこからは原作通り、姫柇は戦闘が起こった現場へ突撃していった。一応、俺は止めた。

アイランド・ガードに任せるようにと。

けれど、駄目だった。

そして原作通りに姫柇とアスタルテが戦い、姫柇が追い詰められたところで、俺が間一髪で助けた。

べ、別にやられそうになるまで隠れていたわけではないよ？

ちなみに、俺がやったのは単純なことだ。

モンハンの武器、ハンマーのマカライトインパクトでアスタルテの眷獣を力任せに殴っただけだ。

その結果、原作以上にアスタルテの眷獣はぶっ飛ばされる。

この戦いで俺の眷獣は使わない。

原作みたいに周りに被害が出るのは勘弁だ。

原作ではアスタルテと姫柇が先走って戦い、古城が姫柇を助けようとした結果眷獣を

暴走させて周りに被害を出していた。

なので、そうならないように姫終を押さえないといけない。

「貴方は何者ですか？ それにその鎧は……なんと見事な」

「……噂には聞いていたけど、ロタリングアの者だな？」

殲教師は俺を警戒しながらも、俺が右肩に担いでいるマカライトインパクトを見て驚く。

特殊効果がない武器だが、この世界基準では超が付くほど優秀な武器だ。

姫終にも既にいくつか見せているが、MHの上位武器は基本的に雪霞狼と同等かそれ以上のものだと言っていた。

とはいえ、今回は少し弱めの武器にしている。

最強系武器を使うとアスタルテを殺してしまう可能性があるからだ。その辺に気をつけないとマズイ。

特に耐久値が設定されていないゲーム系の武器は壊れることがない。そのことも考へるともはや伝説級の武器だな。

「ほお、知っているのですか？」

「ああ、欧州の方で夜な夜な魔族に通り魔みたいなことをして、懸賞金をかけられた男だらう？ この島でも数日前から目撃されていたらしいな。確か名前はルードルフ・オイ

スタツハ。ロタリンギアの殲教師」

身体の中で眷獣達がハッスルしている。というか、落ちつけお前等！　今回は獅子の黄金の出番なのに、無理やり出てこようとするな！

ゴラアーツ！　全員で一斉に俺から出ようとするんじゃない！　俺が風船みたいに破裂するだろうが!!

俺はなんとか平静を装いつつ眷獣たちを押しさえながら、殲教師と会話をする。

「そこまで知っていますか」

「ああ、というわけで、今日はこの辺にしないか？」

「む？！」

「先輩!？」

俺はアスタルテに牽制する為の威圧を飛ばしながら、殲教師に問いかけた。

姫終も一度、黙っていると睨んでおく。

「ここでこれ以上戦えばアイランド・ガードが来るぞ。更に言えば“空隙の魔女”も此方へそろそろ到着する。彼女は捕縛のプロでもある。俺達二人に合わせて彼女たちも相手にして勝てると思っているのか？」

「……いいでしょう。アスタルテ引きますよ」

「命令受託」

姫柊が動こうとしたが、マカライトインパクトをイベントリに素早く戻した俺が、引いていく二人に対しておそらく反射的にだろうが攻撃しようとした姫柊を後ろからしっかりと抱きしめて動けないようにした。

「ちよ、先輩何を！」

「ここで戦つても問題しか起こらない！ 姫柊の本来の仕事は殲教師と戦うことじゃない、いい加減に頭を冷やせ!!」

俺の怒鳴り声に驚いたのか、一瞬ビクリと身体を震わせ、姫柊は大人しくなった。

そして、倒れていた旧き世代に適当な治癒アイテムを使い、問題がないと判断した後、俺達はその場を後にした。

後始末は那月ちゃんに任せる！

翌日の朝。

「古城君、おはよ。ええつと、これはどう言う状況？」

「あ、おはよう。風沙」

「う、うん。おはよう古城君」

「お、おはようございます、凧沙さん」

殲教師との戦いの後、俺は姫柁と共に家に帰ってきた。

で、それぞれの家に帰る前に「今日は遅いからやらないが、朝少し早めに起きるよう
に。……説教だ」と言った。俺が本気で怒っているのが分かったのか、しょんぼりとし
た感じで姫柁は頷き、凧沙が起きてくる三十分前くらいに俺が姫柁の式神に来るよ
うに伝えたのに応じて家に来たわけだ。

そこから、リビングのフローリングの上に姫柁を正座させて自分の仕事なんなの
かを説いた。

更にあの時、無理に現場に行く必要性が全くなかったこと、ロタリングアの殲教師に
七式突撃降魔機槍を不用意に使ったこと、敵が退こうとしたのに不用意に攻撃しよう
としたことなどをしっかりと叱りとばした。

特に七式突撃降魔機槍を不用意に使用したデメリット、術式をコピーされる恐れがあ
ることを伝えると姫柁の顔色は一気に悪くなった。

「そろそろニュースでやっているかもしれないな」

俺はそう言いながらテレビをつけると、昨日の倉庫での爆発のことが放送されてい
た。

一応、事故扱いになっっているけれど。

「なんか、凄い事故だねえ」

「昨日の事件に、姫終が首を突っ込んだ」

「ええっ?!」

「それで俺が説教している最中だ。すまないが、朝食を頼む。三人分だ」

「あ、うん。分かった。……雪菜ちゃん」

「は、はい」

「お仕事なのは分かるけれど、危ないことしちや駄目だよ」

「っ!」

悲しげな表情で風沙はそう言う顔と顔を洗う為に洗面所へと向かい、姫終は俯いた。

「既に言ったが、姫終にもしものことがあったら悲しむ奴等はある。風沙も俺も」

「は、はい……」

俺は正座している姫終に近づき、フローリングに腰を下ろして両手で姫終の顔を包みこむ。

「せ、先輩!?!」

「俺は吸血鬼だ。だから、怪我をしても回復するし、怪我の仕方というか、防御の仕方もある意味では姫終以上に上手い。だから、無茶はするな。いいな?」

「わ、分かりました。け、けれど、先輩だって無茶しちゃだめですよ！」
「安心しろ。頭が吹き飛ばされても大丈夫なように対処はしている」

俺が姫柇を安心させる為にそう言って笑うと、姫柇の顔色は何故か先ほどよりも悪くなった。

あれ、おかしいな？

さて、風沙はチア部のミーティングとかで先に家を出た。

俺は姫柇と共に学校へ向かう。

「しかし、そろそろ本当に考えないといけないな」

「考える、ですか？」

「ああ、第四真祖として完全になる為に、な」

俺がそう言うのと、隣を歩いていた姫柇は立ち止まり、表情を強張らせた。

「先輩、それは、どう言う意味ですか？」

「姫柇は、俺が吸血鬼としての力をどれくらい制御できているか知っているか？」

「え、ええつと、そう言えば書いていませんでしたね。先輩の仕事や家族構成などは書いていましたけれど、第四真祖としての力がどれほどのものか、と言う部分は推測が多かった気がします」

俺は周りに誰も居無いことを確認して、姫終に俺の吸血鬼としての現状を教える。

「まず、俺は吸血鬼としての再生能力はトップクラスだ。けれど、朝がつまり太陽光が苦手、生活リズムが夜型になってしまっている。それと臭いのキツイ葱や玉葱、ニンニクなども駄目になったな。少量なら平気だが」

「そ、そうなんですか？」

「ああ、生姜は平気なのは助かったよ。生姜焼きかなり好きだから」

「へ、へー……」

第四真祖の好物の一つが生姜焼きと言われても困るだろう。とりあえず次へ。

「後、変身能力は一切ないな。霧にすらなれない」

「霧はともかく、変身能力のある吸血鬼はかなり限られていますけど」

「まあ、そうだけれどね。やはり出来ないと少し劣等感が」

「第四真祖が、他の吸血鬼に劣等感を抱いているなんて、知られたら騒ぎになりそうですね」

「ははは、まあ、そうだろねえ」

変身能力を持っている吸血鬼はかなり数が少ない。霧になる力の応用らしいけれど、かなり別種の才能が必要らしい。

眷獣の影響か？

「それと吸血行為をしたことがないから、俺の中にいる眷獣達が戦いの度にハッスルして外へ出ようとする」

「え、!?!」

「昨日も実はヤバかったんだよな。もしも姫終とあのホムンクルスが戦ったりしたら、眷獣が「俺も混ぜて！」っていう感じで周りを吹き飛ばしていた可能性が高い」

「……………」

「だから、不用意に戦わないように。いいな。姫終」

「は、はい！」

俺の言葉に姫終は冷や汗をかきつつも、ブンブンと頷きながら俺の後を付いてくる。これで、少しは突撃癖が直れば良いけれど。そう考えながら学校へ向かった。

第11話

「おはようさん」

「おはよう」

「おうはよう、暁君。矢瀬君」

他のクラスメイト達が、社長と呼ぶようになったが、クラスの委員長の築島倫は俺のことを社長とは呼ばない。

有難いことだ。

「おはよう、浅葱。昨日はよく眠れたか？」

「え？ ええ、緊急の仕事も無かったしね」

「そうか、倉庫で事故があっただろう？ もしかしたら、仕事に駆り出されたかと思ったんだが眠れたのなら良かった」

「あー、あのニュースね」

浅葱が思い出す様にそう言うと、築島と矢瀬も会話に入ってくる。

そのまま四人で浅葱の席の周りに集まる。

「結構大きい事故だったみたいね」

「俺はなんか脊獣が暴れたって聞いたぜ」

「ここ数日騒がしいな」

「本当よね。やるならよそでやってほしいんだけど」

「浅葱の場合はモロに被害が出るもんな」

「大変だなあ」

「浅葱フアイト」

「アンタ達、他人事だと思って！」

それから少し、事故の話をして、話題は授業の世界史の話になった。

「しまった。世界史のレポート忘れていた」

「お、珍しいな。古城が忘れるなんて」

「本当だね。出来ないなりに頑張る暁君らしくない」

「いや、ちよつと事情があつてな」

「……ねえ、また何か首突つ込んでるの？ 古城」

浅葱の言葉に、こちらの事情を知っている矢瀬が心配している素振りをし、築島と周りで聞き耳を立てていたクラスメイト達は心配そうにこつちを見ている。

ああ、少しはクラスメイト達に心配されているらしい。

ちなみに、浅葱はかなり心配そう顔をしている。

俺がボロボロの状態で居る時に浅葱と鉢合わせすることが多いので、かなり心配させてしまっている。

「大丈夫だよ。いざとなったら那月ちゃんに全部投げるから」

「勝手に押し付けるな。馬鹿者め」

気を抜いていたわけではないが、背後からの声に俺は一瞬凍りつき、

「あ痛っ!?!」

「ふん、時間だぞ。全員席につけ」

突然現れた那月ちゃんにみんな驚きながらも、チャイムが鳴ったので全員素直に席に着く。

「ああ、それと古城。昼休みに生徒指導室まで来い」

「あ、はい。分かりました」

クラスメイト達から、コイツまた何かしでかしたな? という視線が飛んできたが、俺は素知らぬ顔で一時間目の授業の準備をした。

「昨日の夜。転校生徒と二人きりで過ごししていたようだし、職業上詳しく聞かせてほしいなあ」

ニヤツと嘲笑う那月ちゃんの言葉に、クラスメイト達が一斉に騒ぎだす。

特に男子達からの殺意の籠った視線は久しぶりに冷や汗をかいたよ。

ちなみに、一番怖かった視線は築島、一番心に堪えたのが泣きそうな浅葱の表情だった。

第12話

一時間目の授業が終わった直後に襲いかかってきた嫉妬に狂った男子のクラスメイト達とリアルファイトをしつつ、時が流れていった。

俺の戦闘力が天元突破しているのはみんな知っているので、遠慮なく襲いかかってくるクラスメイト達。

一年ほど前から、クラスの男子達が俺を相手に何秒持ちこたえられるかで女子達の間で賭けが行なわれるほどだ。

「はあー、懲りない連中だな」

「アンタが煽るからでしょうが。クレイニングゲームでぬいぐるみ取ってやったとかさ」

「あははは、真夜中デートとか羨まし、けしからんとか言って毎回同じこと言うからちよつとね」

「……でも、ぬいぐるみ取ったんだ」

浅葱のポソツと眩かれた言葉に、俺は少し心が痛くなったので浅葱を今度遊びに誘うことにした。

「今立てこんでいるから無理だけど、今度どこか遊びに行くか？」

「え？」

「キーストーンゲートで、ケーキバイキングやっているだろう？」

「いいの？」

「ああ、いいぞ。浅葱には世話になっているしな。行かないか？」

「い、行く！」

「なら、決まりだな」

嬉しそうにスマホでスケジュールを確認している浅葱を横目に、俺は即座に築島に視線を送った。

築島さん、これでよろしいでしょうか？

——うむ。

築島は俺が第四真祖だということを知っている。

彼女は浅葱を大事な友人と思っているので、俺が浅葱を泣かせるようなら問答無用で俺が第四真祖だということを世間に公表する。と明言している。

なので、浅葱を傷つけないように原作以上に気をつけないければならない。

後、学校での生活で築島にはかなりお世話になっている。

原作始まる前からちよこちよここと、一般人の噂話とかを集めてもらっているのだ。女子のネットワークって凄いな。

偶に情報屋も知らない情報を持っている時もあるから結構侮れない。

「つと、昼は姫終とたぶん那月ちゃんと食べるから、矢瀬達は」

「ん、じゃあ俺は今日は先輩のところ行くわ」

「なら、浅葱。私達は学食に行きましょう」

「ええ、分かったわ」

こうして、俺は昼休みに姫終と共に那月ちゃんの元へ向かった。

生徒指導室に入ると、那月ちゃんは既に持ってきたアンティークのソファに座っていた。

「来たか」

「これ、昨日のお詫びのケーキと茶葉」

「ほお………よこせ」

俺は先手を打って、昨日のお詫びとして手作りのチーズケーキ（特性ブルーベリーソース付き）と那月ちゃんが好きな銘柄の一つの茶葉を贈った。

「まあ、昨日の件は良いだろう。そこまで面倒ではなかったしな」

「なら良かった」

「……それで、貴様が岬のクラスに入ってきた転校生か」

「は、はい。中等部三年の姫終です」

「余計な揉め事を起こさないのなら、歓迎はしてやろう」

……俺への好感度が高い御蔭で、姫終への好感度が地味にマイナスになってないか？
ちよつとむくれている様な気がするぞ。ポーカーフェイスで分かり辛いけれど。

「さて、本題入ろう。昨日、アイランド・イーストで派手な事故があったが……何があつた？」

「ノーコメント」

「せ、先輩!？」

「……………古城」

あ、ヤバイ。暁ではなく、古城と呼んだ。

かなり怒つてらっしやる。けれど、原作が開始された以上。大人しくしてもらおう。

「俺が信じられないか、那月」

「——っ!？」

「せ、先輩!？」

無駄に良い声とキリツとした表情で那月ちゃんに問いかける。

姫終は驚いた顔をしている。風沙曰く「古城君つてさ、まじめな時だと大人の男性の表情と声になるからビックリするよ」とのこと。

結構、女性陣に好評だ。

「……………はあ、何をするつもりだ？」

「歩み出すつもりだ。止まった時を動かす時が来たらしいからな」

それっぽいことを言つて、那月ちゃんを納得させる。

というか、中二か！ 俺は。

あ、存在自体が中二っぽい設定だったな。ははは！ はあ……。

ちなみに、那月ちゃんも結構中二っぽい言い回しが好きらしい。本人はそういうセリフは言わないけれど。

ちよつと中二臭いシルバーネットワークレスとかプレゼントすると地味に喜ぶ。

言わないよな？ うん、言わないな。姿形が中二っぽいけれど。

デイスつてないよ！ 那月ちゃんをデイスつてないからね！

「分かった。だがな、古城。忘れるなよ」

「何を？」

「お前は、いや、お前も私の大事な生徒だということを、だ。……あまり妹に心配をかけるなよ」

「ははっ、当然だよ。大丈夫だ。信じてくれ」

この後、三人で昼食をとった。

レアチーズケーキはかなり好評で、今度また持って来いと那月ちゃんに催促された。姫柊は、無心でレアチーズケーキを食べていた。

途中で、俺と那月ちゃんが微笑ましそうに姫柊が食べている姿を見ていることに気づき、顔を真っ赤にしていた。

戦わないよ?.

「助かったよ、浅葱」

『なら、良いけど。今日はキースストーンゲートには近づくなつてことは、また……』

俺はスマホで浅葱と通話しながら、目の前にある四階建てのビルを眺める。

隣にいる姫終には、辺りを警戒してもらっている。

「大丈夫だ、浅葱。ちよつと派手だけど、大したことは起きないから」

『……そうね。翌朝のニュースでどこかの大臣や社長の顔が腫れ上がつてないことを祈るわ』

もしくは世界遺産が破壊されないことを祈っているわ。と浅葱は苦笑い気味に言った。

「ノートルダム大聖堂が溶けたのは、俺のせいではないのだが」

「……先輩、今何か聞き捨てならない事を言いませんでしたか?」

驚愕の表情で俺を見る姫終をスルーして、俺はホームクルスの調整施設のあるビルへと向かう。

「先輩は本当に非常識ですね」

「いや、だって道具使った方が楽だろ？」

原作では南京錠の幻術？ で騙されそうになる古城だが、俺はビルの壁にドラえもん
の秘密道具【通り抜けフープ】を設置してサクッとビルの中に入る。

姫終は通り抜けフープを見て絶句し、俺がビルの中に入った後もアワアワしていた。

「はあ、この道具もとんでもないですね」

「俺の錬金術の腕も中々だろ？」

「ふう、そうですね。魔術の力を感じませんが、先輩が錬金術だと言うならこれも錬金術
の道具なんですよ」

ありや、流石に錬金術で作った物ではないと分かったか。

まあ、深く突っ込んでこないところを見ると、聞いても無駄だと分かっているみたい
だな。

「さて、そろそろだな」

「何が……」

ですか、とは姫終は言えなかった。

失敗作のホムンクルスが入った水槽。

「これは」

「失敗作だろうな。これがあるから、俺もホムンクルスをまだ作らないんだよ」
俺の言葉を聞いた姫終が俺を見る。

「先輩は——」

「来たか、アスタルテ」

ペタリ、ペタリと全身ずぶ濡れで現れたのはアスタルテだった。

「警告します、ただちにここから退去してください」

「この島が沈むからか？」

「え？」

俺の言葉に、姫終が戸惑う。

「オツサン、居るんだろ？ 出てこいよ」

「ほお、その口ぶりですと、私の目的を知っているようですね」

「ま、な。だから、最後通告をしに来たんだよ」

「ふむ……」

「右腕はその内、お前達のところに戻ってくる。アスタルテを置いて帰れ」
俺の言葉に、殲教師は怒りを露にする。

「その内？ 貴方はふざけているのですか？」

「ふざけてないさ、で帰る気は？」

「アスタルテ！ やりなさい!!」

殲教師の言葉に、アスタルテは即座に首の無い、巨人のような脊獣を纏い、俺達に襲いかかってくるが。

「警告したからな、帰るぞ姫終!」

「え?!」

雪霞狼を構えてやる気満々だった姫終の首根っこを掴み、俺は即座にLEVEL—4の超能力……じゃない、正確には大能力でビルの外へテレポートした。

「……は?」

「ビルの外だ」

俺の言葉に唾然とする姫終。俺は姫終の手を掴んで歩きだす。

「せ、先輩! 離して下さい!」

「今は駄目だ。あそこは場所が悪い」

「場所って、確かに狭い場所ではありませんが! 島が沈むって、どういことですか!?!」
先輩は彼等が何をするか知ってて逃げたんですか!?!」

俺の手を振り払い叫ぶ姫終に、俺は殲教師の目的をザックリ教える。

「この人工の島を支えている要石、それは聖人の右腕だ」

「……供犠建材」

「そうだ。奴らからしてみれば、到底許せることではないだろう」

そんな、と驚く姫柊に俺はしつかりと頷く。

「で、でも、供犠建材は国際条約で禁止に」

「バレなきや良い。て、ことだろうな。島側は。それに代わりの要石を用意するのも金がかかる。後は、ロタリンギアからしてみれば報復処置だろう。五十六万人を殺せれば自分達の力を誇示できるしな」

「そんな……」

呆然とする姫柊の手を掴んで俺は歩き出す。

「せ、先輩、何処へ!?!」

「暁カンパニーの社長室だ」

「え?」

「あのオツサンを止める。第四真祖として、だ」

「そ、それってどういう」

姫柊の疑問には答えず、俺はスマホでセバスニヤンに連絡を入れた。

「セバスニヤン、叶瀬に伝えてくれ」

「え? え? 叶瀬さん?」

戸惑う姫柊を横目に、俺はセバスニヤンに言った。

「あの約束通り、叶瀬を妻にすると」

「……………え？」

姫終の呆然とする声はやけに俺の耳に届いた。

さて、首チョンパ、ラッキースケベ、その他諸々。

俺には無理っす!!

ハツキリ言うね。原作一巻で姫終から血を吸わせて貰う古城、マジ主人公!

いや、無理だろ。出会って数日で血を吸わせてもらうとか。

だから、俺は姫終の血を吸うのは原作三巻辺りになるだろうと想定して動いていた。

中身が俺なので原作通りには姫終の血を吸えない可能性が高い。

だから、いざという時の保険をかけた。

それが叶瀬だ。

叶瀬が暮らしていた孤児院を助け、その後も色々と手助けをした俺はタイミングを見て、叶瀬にいつか無理難題を頼むかもしれない。と告げていた。

叶瀬は了承してくれて、俺が第四真祖になった後、土下座して、何かあったら血を吸わせて欲しいと頼んだ。

結果、叶瀬は良いと頷いてくれた。

だから、俺は一巻の時点で姫終から血を吸わせて貰えなさそうと判断したら、一巻で叶瀬、二巻で叶瀬、三巻で姫終とラ・フォリアに血を吸わせて貰う予定だ。

煌坂？ うん、小さい時に俺が調子に乗ってちよつとやらかして、原作通りに行かない可能性が高い。

そして、俺への姫終の好感度はそこまで高くない気がするので、叶瀬の血を吸わせてもらうことにした。

「叶瀬は？」

「準備は終わってますにや」

「分かった」

暁カンパニーの社長室に姫終と共にテレポートして待機していたセバスニャンに声をかけ、叶瀬が待つ部屋へと移動した。

俺と叶瀬と姫柇

叶瀬が待つ部屋に俺と姫柇は入る。そこは会議室用に作られた広い部屋だ。

叶瀬は肩が少し出たスタンダードなウエディングドレスを着て、椅子に座っていた。

「お、お兄さん、雪菜ちゃん」

「待たせたな。叶瀬」

「か、叶瀬さん……綺麗です」

少し緊張した様子の叶瀬。その叶瀬を見て思わずというふうには姫柇が呟いた。

叶瀬の傍に控えていた護衛と世話役のアイルー達は、俺に一礼をして部屋から出て行く。

「事情は聞いているな？」

「はい、島が危ないと聞いていました」

「俺に血を吸われることの意味も？」

「はい。お、お兄さんのお嫁さんになる。ということですよ？ 大丈夫です。お兄さんに助けられてからずっと、わたしは恩返しがしたいと思っていました。孤児院と院長先生、兄妹達。みんなを助けてくれたお兄さんの力になりたい、です」

叶瀬は真つ直ぐに俺を見つめながら、俺に力を貸してくれると言ってくれた。

叶瀬の実家のことを考えると色々と問題が起こるだろう。

少なくとも、ヴァトラーとはどう頑張ってもガチバトルを一度はするはず。

そのことを考慮すると、アルデイギア王国との関係は原作の市民感情も含めて考えればそこまで悪くはならないはずだ。

「分かった。……姫終」

「は、はい。先輩」

俺に声をかけられて、ビクリとする姫終。

「すまないが、席を外してくれ」

「え……？」

「流石に人前で、血を吸うのは恥ずかしいからな」

「……あ」

俺が姫終にそう言うと、彼女は悲しげな表情になった。

あの止めて下さい。俺が悪者みたいじゃないですか。

とは言え、複雑なのだろう。監視対象が完全な第四真祖になるのをただ黙って見えないといけないことが。

それから五秒ほど、姫終は何か迷う様な素振りを見せてから口を開いた。

「せ、先輩は」

「ん？」

「先輩は、とても強いと聞いています。ほ、本当に第四真祖の力が、叶瀬さんの血を吸うのが必要なのですか？」

その問いは、既に俺が何度も自問自答を繰り返した物だった。

俺の持っているチート能力のことを考えれば、いくらこの世界用にある程度弱体化や調整されているとはいえ、本当に第四真祖の力が必要か？ と問われればNOと答えられる。

実のところ、水の女神アクアなどの神の力も限定的ではあるが使用可能だ。

だから一時期は、別に眷獣の力なんて必要ないんじゃないか？ と真剣に考えもしたのだ。

「今回のことはきっかけに過ぎない。俺が吸うのは眷獣達の暴走を食い止めるの為でもある」

「眷獣の……暴走？」

「そうだ、姫柎。俺が受け継いだ眷獣達には意思がある。彼女達は俺に完全な第四真祖になるように発破をかけている。その上で自分達を使えと、俺を促しているんだ。けれど、第四真祖の眷獣の力は強大だ。だから、普段は別の力を使う。すると眷獣達は段々

機嫌が悪くなる」

「き、機嫌ですか……」

「で、今の眷獣達の気持ちを一言でいうなら」

——我々に出番を!!

「は、はい?」

「そうしないと、俺の意思とは無関係に眷獣達が俺の身体から飛び出て、あちらこちらで迷惑をかけるだろう」

「いや、あの、迷惑どころの話ではない気がするのですが……」

原作以上に、眷獣達コイツ等が暴れん坊!

「どの道、眷獣を掌握しないと島が沈む。割と本気で」

「で、でも、だからって叶瀬さんの血を吸えば、今後の叶瀬さんは。第四真祖の……そのお嫁さんになったら、叶瀬さんの身に危険だって」

「大丈夫です、雪菜ちゃん」

「か、叶瀬さん?」

「覚悟は、出来ています、です」

叶瀬は本当に聖女の様な慈悲深い、全てを受け入れる様な頬笑みを浮かべて姫柇を安心させようとした。

その結果、姫柇が更にうろたえた。

「姫柇は、俺が叶瀬の血を吸うのに反対なのか？」

「え、あ、はい！ もちろんです！ か、叶瀬さんが犠牲になることなんてないと思います！」

姫柇の言葉に、俺はこの流れならいけるか？ と素早く考えて、姫柇に問いかけた。

「……それは獅子王機関の劍巫としての意見か？」

「はい！ か、叶瀬さんが第四真祖のお、お嫁さんになったら、叶瀬さんが危険な目に狙われることが多くなるはずですよ」

「……ふむ、かと言って、血を吸わないという選択肢はない。仮に今血を吸って眷獣を掌握することなくあの坊主とアスタルテを撃破したとしても、俺が遠くない未来にこの島を沈めてしまう」

よし、誘導できたかな？ と思い、姫柇を見ると、「ど、どうしよう」という顔をしている。

「やはり、今叶瀬の血を吸わないと駄目だな。他に候補者もないのだし」

「——っ!？」

俺が小さく溜息を吐き、叶瀬を見る。

叶瀬はちよつと困惑していた。けれど、俺が右手を叶瀬の頬に触れさせると、叶瀬は頬を紅くして俺の右手に両手を伸ばしてきた。

「叶瀬」

「は、はい。お兄さん」

「正式な結婚式などは、もつと先になる。俺が叶瀬の血を吸えば、形式上は第四真祖の、俺の婚約者と言う形になるが、いいか？」

「は、はい。お、お兄さんのお嫁さんに、してください」

叶瀬は目を伏せ、俺の右手を両手でしっかりと掴みながら俺に大きく一歩近づいてきた。

俺は叶瀬の背中に左腕をまわし、優しく抱き寄せる。

叶瀬を抱き寄せると、ふわりと苺のショートケーキの様な甘い香りがした。

それと、叶瀬はうっすら汗をかいていた。

緊張しているみたいだ。無理もない。

「叶瀬……」

「お、お兄さん」

頭に血が上るのが分かる。俺はじつくりと叶瀬を眺める。

美しい目や唇。形の良い眉に鼻筋。中学生なのに色気のある、綺麗な肩。呼吸が少し、荒くなる。

「いくぞ、叶瀬」

「は、はい。お兄さん」

普段隠している牙が伸びる様な錯覚をおぼえる。叶瀬が少し、身体をこわばらせる。

そして、俺が叶瀬の血を吸おうとした瞬間。

「や、やっぱり駄目です！」

——ザクツ！ と肉を切る様な音共に、俺の脇腹に激痛が走った。

「いだっ!!」

「きゃっ、お、お兄さん!!? だ、大丈夫ですか!?!」

突然の脇腹への不意打ちに、思わずそのまま床に倒れ込んでしまう俺。

見ると、脇腹から結構な血がピューツと飛び出ている。

ヤバツ！ この量は直ぐに血を止めないと危ない！

俺は慌てて、傷口を再生する為に吸血鬼の能力をフル稼働させる。

で、いつの間にか雪霞狼を装備して俺をぶっ刺した姫終へ視線を向けると。

「ゆ、雪菜ちゃん」

「……………めです」

「な、何だつて?」

叶瀬と俺が驚いていると、姫終は左目から一雫、涙を流しながら叫んだ。

「わ、私は先輩の監視役です! だから、一般人の血を、第四真祖が吸うのを見て見ぬ振りをするのは駄目なんです!!」

血に塗れた雪霞狼を構えながら、追いつめられた表情で叫ぶ姫終。

叶瀬はそんな姫終を見てオロオロしている。

あー、これなら……いけるかな?

とりあえず、狙ってみるか。

「だが、時間がないぞ? ここで、叶瀬の血を吸わなくても坊主には勝てるだろう。けど、眷獣の暴走のことも考えれば、どの道俺は血を吸わないといけない。現状、俺に血を吸わせてくれるのは叶瀬だけだぞ」

俺が姫終にそう言うと、姫終は破れかぶれと言う感じでこう叫んだ。

「わ、私の血を吸えばいいじゃないですか、先輩!!」

よっしゃつ、良く言った!

俺は内心ガッツポーズをとった。

獅子の黄金は、姫終と相性が良いとヴァトラも言っていた。

そのことを考えるなら、姫終の血を吸うのが一番良い。

無理だろうと諦めていたけれど、まさか姫柎から血を吸えと言ってくれるとは。

「それは嬉しいけれど、叶瀬にウエディングドレスまで着せて何もしないというのは」
恥をかかせてしまう。と俺が言うと叶瀬が慌ててこう言ってきた。

「だ、大丈夫です。それよりも雪菜ちゃんのことをお願いします」

「え？」

俺が姫柎に視線を戻すと、姫柎は床にべたんと女の子座りをして項垂れていた。

静かにちよつとだけ泣いている。

「あ、あー、つとこれは……」

「お兄さん」

「な、なんだ。叶瀬」

「雪菜ちゃんのこと、お願いしますね」

叶瀬は少しだけ悲しそうな表情でそう言うと、部屋を出て行く。

俺は少し迷ったが出て行く叶瀬にこう声をかけておいた。

「埋め合わせは必ず」

俺がそう言うと、叶瀬は振り向いて笑顔を見せてくれた。

ただ、少しだけ拗ねている雰囲気だ。

埋め合わせは気合を入れないと駄目だな。

「姫終」

俺が声をかけると、ピクツと姫終の身体が震えた。
さて、ここからが勝負だ。

もし、失敗したら、叶瀬に土下座して血を吸わせてもらおう。

気持ちがあつた日（島が沈みかけている日でもあつたが）

姫終が静かに泣いている。

姫終自身もなぜ自分が泣いているのか、分からないのだと思う。

恐らくだが、この世界の物語——ストライク・ザ・ブラッドの修正力で、精神的に俺が叶瀬の血を吸うことへの忌避感、嫉妬、悲しみ等の感情が引き上げられているのだから。

本音を言えば、修正力に反逆するために強引に叶瀬の血を吸っても良かったのだが。

今の姫終を見ると、叶瀬の血を吸った場合悲しみのむこうへと行きそうな気がして怖い。

雪霞狼にベツトリと俺の血が付いているし。

「姫終」

「は、はい」

俺が声をかけると、ビクツと身体を震わせて、恐る恐る顔を上げて俺の顔を見る。俺は姫終に近寄って、姫終の隣に胡座をかいて座る。

「これから、色々な連中がこの島に、第四真祖にちよつかいをかけてくるだろう」

「そ、そうですね。いくら隠しても、どこからか先輩のことは漏れるでしょう」

「姫終は覚悟があるか？」

「覚悟……」

俺は姫終の目を真っ直ぐに見る。

落ち着きを取り戻した姫終も、俺の目を見返してくる。

「この島を守り、俺と共に生きる覚悟だ。獅子王機関とも場合によっては対立することになるかもしれない。大丈夫か？」

「せ、先輩は、獅子王機関と対立する気があるんですか？」

「その気は無いね。けど、場合によっては獅子機関と戦うこともあるかもしれない」

その時、姫終は俺の隣に立っていられるか？

俺の問いに、姫終は数分沈黙した後、答えた。

「わたしの血を吸ってください、先輩」

「本当に、良いんだな？」

「はい、一般人の叶瀬さんより、わたしの方が世間からバッシングを受けてもダメージ少ないですから」

ん？ 何を言っている？

「か、監視役でもあるわたしのこの行動は、人命救助に当たると思います。……
だから」

やや汗をかき、少し恥ずかしそうに姫終は言った。

「これからも、わたしが先輩の隣に立っていられるようにしてください」

「分かった。確かに叶瀬が一番最初に第四真祖の覚醒を手助けした。なんてメディアに報じられれば、叶瀬の身を守るのが大変になるしな」

叶瀬の実家のことを考えると、相当荒れるだろうな。

第四真祖の最初の婚約者。煩い奴等もまだまだ居るだろう。

「姫終、吸血するためには多少は性的興奮をしないとイケない」

「は、はい。それは知っていますけど」

俺は初めてだし、姫終のためにもソフトなお願いをしてみた。

「姫終のパンツを見せてくれないか？」

初めての吸血は、パンツを眺めながら太ももからいただきました。
その結果、俺の左頬が三倍くらいの大きさに変化したけど。

姫柊は世界を狙える拳を持っていると断言しよう。

た。
ちよつとだけ嫌な顔をされたけど、パンツを見たい連中の気持ちが理解できた日だった。

お疲れ様！

ロタリンギアの殲教師ルードルフ・オイスタツハはキーストーンゲートの嚴重な警備を突破し、キーストーンゲートの最下層までたどり着いた。

警備が想定よりも多く多少時間がかかったが、彼にとって問題はなかった。

キーストーンゲート最下層にたどり着くまでは。

「ど、どういふことですか!!」

殲教師の困惑混じりの叫びがキーストーンゲート最下層に響き渡る。

殲教師が睨み付ける先、最下層中央にある四基の人工島を固定するアンカー。

小さな逆ピラミッドの形をした金属製の土台——アンカーを、その中央を一本の柱で杭のように刺し貫いて固定している。

その柱は黒曜石に似た質感の半透明な石柱、要石である。

その中に求めている聖遺物があるはずだったのだが。

「ロタリンギアの聖堂より篡奪されし不朽体、あの御方の右腕はどこだあああああ
!!!」

あるはずのものがない。

殲教師ルードルフ・オイスタツハの叫びがキーストーンゲート最下層に響き渡ると同時に、殲教師とアスタルテの背後でバタンと扉が閉まる音が聞こえた。

「——っ?!」

この場所では起こり得ない音と二つの気配を感じ取り、殲教師とアスタルテは素早く背後を振り返って臨戦態勢に入る。

「聖者の右腕はここにはないぞ」

「貴様は!」

殲教師の目に映ったのは、パーカーを着た気だるげな少年と銀の槍を構える黒髪の少女だった。



「どうい「今ごろ聖者の右腕は、ロタリングアの王族へ渡されるはずだった」

俺の言葉に困惑の表情を浮かべる殲教師。

殲教師が大人しく帰った場合は、王族から教会へ聖遺物の返還が行われるはずだった。

王族は教会に恩を売れるわけだ。

「分らないか？ お前は嵌められたんだよ。教会の発言力が高いことを嫌がっている王族と政治家達にな」

「馬鹿な!!」

「本当だよ。ロタリングアは戦王領域と隣接している。その結果、魔族への敵愾心は高いし、魔族労働者との軋轢もある。けどな、魔族労働者も重要な存在なんだよ。国家にとつてはな。ある程度の軋轢、敵愾心は必要悪だ。けど、お前らはやり過ぎたんだよ。それに魔族と結ばれる人間だっている。もちろん上流階級にもな。魔族の血が流れているだけで、差別され殺される。許せると思うか？——今頃、お前の所属している教会は世界中からバッシングされているだろうよ。自ら聖遺物を返還し、頭を下げて賠償金も払うと言いに来た連中への回答が五十六万人を殺すための報復処置だ。教会のお前の上司と協力者達にはテロリストとして国から特殊部隊を送られ、今頃は逮捕か殺されているはずだ。晴れてロタリングア王国は、必要以上に魔族との対立を煽っていた邪魔な教会勢力の力を大幅に削減できるといっわけだ」

俺は一呼吸置いて、殲教師に告げた。

「お疲れ様、お前は監獄結界行きだつてさ」

俺が笑顔でそう告げると、殲教師は言葉にならない叫びをあげながら、俺に突進して

きた。

「先輩!!」

「大丈夫だ。アスタルテの相手をも！」

「わ、分かりました」

一気に俺との距離を縮めてきた殲教師は、手にしていた戦斧で力任せに俺の頭を力チ割ろうとする。

相当頭に血が上っているのだろう。

冷静さなんてない。

わざわざ避ける必要もない。

けれど、久しぶりにこの能力を使ってみるか。

「キングクリムゾン！」

ガンツ！ と殲教師の戦斧が床を砕く。

「なっ?!」

目の前にいた俺が突然いなくなる。

その事実混乱している殲教師の背後で、俺は右腕を殲教師へと向ける。

俺の中にある眷獣が待ちきれないというように、俺の体の中で激しく暴れている。

いま出してやるからもうちよつと待て！

「焰光の夜伯カレイドブラッド」の血脈を継ぎし者つて、最後まで言わせろよっ!!
うおっ、危ねえっ」

殲教師が何かをしようとした俺の妨害のために戦斧で素早い一撃を叩き込んできたが、とつさに回避する。

回避と同時に、俺の頭上へ雷光を纏った雄々しい黄金の獅子が現れ……。

『がおーんっ!!』

可愛らしい獅子の咆哮。大きさはアニメで見たのと変わらないが、全体的にデフォルメされた感じで、ぬいぐるみのように愛らしい姿。

「え、えつと先輩、これは……?」

「れ、獅子の黄金と言うよりは、れぐるすあうるむ。つて感じだな」

その場にいた四人全員が数秒、獅子の黄金を見て固まる。止まった時を動かしたのは殲教師だった。

「……………しているのですか?」

「え?」

「わ、私を馬鹿にしているのですかあああああああつっつ
!!!!! アスタルテ
エエエツツ、殺りなさいいいいっ!!」

「命令受託」

「姫終ー!」

「分かっていきます、先輩!」

獅子の黄金が殲教師に襲いかかる前に、能力を使う。

「必中! 直撃! てかげん!」

殲教師への獅子の黄金の攻撃をアスタルテが庇うように前へ出る。

アスタルテは原作通り、姫終からコピーした力の神格振動波駆動術式で獅子の黄金の攻撃を防御しようとするが……

獅子の黄金はアスタルテに雷光が当たる直前、不自然な軌道を描いて殲教師にその力を叩き込んだ。

「ぬっ!? ぐおおおおおっ!!!」

精神コマンド（スパロボ）の力で、聖戦装備要塞の衣の効果をも無効化してダメージを与え、てかげんのお陰で殲教師は虫の息だが生きている。

次はアスタルテだけど、

「アスタルテ。神格振動波駆動術式を俺は無効化できる。出来るなら抵抗しないでくれるとありがたい」

見た目がアレな獅子の黄金に膨大な魔力を注ぎ込みながら満面の笑みで抵抗は無意味と伝えると、アスタルテはちよつと泣きそうな表情で「命令受託」と言ってくれた。

こうして、殲教師との戦いは終わった。

後片付け

あの後、マヒタケ（モンハンのアイテム）を念のために殲教師の口に突っ込んで、アスタルテと姫柇を連れてキーストーンゲート最下層からどこでもドアで暁カンパニーの社長室へ移動。

移動後、アスタルテの眷獣を俺が掌握した。

原作のように姫柇を当て馬にするのは嫌だったので、事前にアスタルテと姫柇に説明をしてからアスタルテを抱き締めようとしたのだが。

「絵的に犯罪チックなので、わたしを使ってください」

と、姫柇が言ってくれたので、しばらく迷ったが姫柇を抱き締めて性的に興奮してからアスタルテの眷獣の掌握を行った。

途中で気づいたけど、社長室のドアから叶瀬が覗いていたけど、もしかして帰ってくるの待ってた？

それから那月ちゃんに連絡を入れて、アスタルテを引き取ってもらった。「余計な仕事を増やしてくれたな」

ウチに来て開口一番がそれだった。相当ご立腹らしく。機嫌を直してもらうのに数

日必要だった。

殲教師も監獄結界へ入れられ、ロタリングア王国の方は国内に蔓延る西欧教会の過激な連中の排除に成功したようだ。

でも、それは同時に国内の防衛力が低下したことを意味するのだが、不思議なことにロタリングアへちよっかいをかけていた吸血鬼などの魔族の一部が突然行方不明になったらしい。

不思議だね！

この幸運を無駄にしないために、ロタリングアは今現在防衛力を高める為に色々と頑張っているようだ。

それと教育改革も行い始め、もう少し人と魔族が対立しないような社会を作ろうとしている。

どうなるか分からないが、影ながら俺も応援させてもらおう。



殲教師のキーストーンゲート襲撃の翌日、放課後の屋上で矢瀬基樹は恋人の緋稻古詠に今回の事件について問いかける。

「予定通り、血の伴侶を得た暁古城は完全な第四真祖へと近づいた、か」

矢瀬の言葉を緋稲はなにも言わない。

ただ、じつと空を見上げ続けるだけだ。

「どこまでが、古城のシナリオだ？ 兄貴まで引つ張り出して、島の上の連中はかなり慌ただしいぞ」

「六割は、後は色々と手伝った。とだけ」

彼は大雑把ですから。という緋稲の言葉に矢瀬は溜め息をついた。

「親友は、失敗したらそれはそれでどうかしてしまっからな。しかし、これですますます手が付けられなくなつたな。スタンドと呼ばれる謎の力。ローマのコロッセオを破壊した巨大な黒い影を操る力に、世界のどこにでも瞬時に移動できる摩訶不思議な道具」
「他にもありますよ。強力なアンデットを一瞬で浄化できるアクアと呼ばれる謎な神の力、何故か素材を入れて混ぜるだけで作りたいものが作れてしまう錬金術の釜」
他にもまだまだたくさんあるが、パツと思いつく古城の力を思い出して二人は溜め息をつく。

「……第四真祖の力だけなら、どうにかなつたのですが」

疲れた表情で、遠い目をする恋人に、矢瀬は古城にもう少し自重しろと言うことにした。

「あ、第四真祖からお野菜とお魚をもらったので、夕食作りに行っても良いですか？」
「もちろんです!!」

矢瀬はこのあと恋人と穏やかな至福の時間を過ごし、古城へ自重しろと言い忘れ、恋人がさらに大変な目に遭うことになるのだった。



事件から三日が経った。

放課後、俺は暁カンパニーへ姫柊と叶瀬を連れて三人で向かい、書類仕事を終えてから三人でお茶を飲んでいた。

「あー、そういえば。太ももの具合はどうだ。姫柊」

「え、ええつと、もう大丈夫ですよ。先輩」

叶瀬がお茶のおかわりを取りに行つて二人きりになったので、気になっていたことを聞く。

吸血衝動に飲み込まれた俺は、姫柊の太もも。

それも内腿の近くに噛みつきそこから姫柊の血を啜った。

かなりの激痛だったらしい。

吸血が終わり、正気に戻った後で姫終に「ほつつつつつつとに、痛かったです
!!!」と怒られてしまった。

怪我はポーションで直ぐに治したが、少ししびれた感じがするとあの時の姫終が言っていたので、大丈夫か確認をとる。

「無理させてごめんな」

「いえ、その今にして思えば、そこまで悪い気はしませんでしたから」
「え？」

「あ、ええつと、痛いことは痛かったですよ。けど、ここ——じゃない。嫌じゃない痛みでした」

「ここ？ 嫌じゃない？ どういう意味だ。」

「訓練などの辛い痛みじゃない、先輩だから許せる痛みと言えば良いのでしょうか。と、とにかく大丈夫です！」

「そ、そうか。なら良かったけど」

「はい、血を吸われている時の雪菜ちゃん。とても優しい表情をしていました」

姫終が顔を赤くして慌て出したので、俺も深く聞かずにお茶を飲もうとしたタイミングで、隣から叶瀬の声が聞こえてきて、俺は驚いてむせてしまう。

「あ、お兄さん大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だ。というか、いつの間に」

「お、おかえりなさい、叶瀬さん」

「はい、ただいまでした」

俺だけではなく、姫終にも気付かれずに部屋に戻って来るなんて。

油断していたとはいえ、ずいぶん気配を消すのが上手くなったな。

後はすばやさの種を多めに食べさせた結果か。

「というか、優しげな表情？」

「はい、あのとときの雪菜ちゃんは、聖母様みたいでした」

「あ、あの叶瀬さん？」

「血を吸っているお兄さんの頭を優しく抱き寄せ、髪を撫でる姿。とっても素敵でした」

頬を赤らめている叶瀬に悪いけど、端から見たら明らかに警察を呼ばれる状態だよ

な。

姫終を押し倒さなかったみたいだけど、それでも女子中学生の太ももに顔を近づけて

いる俺って………。

うん、反省しよう。

「ところで、気になったんだけど。叶瀬」

「はい、どうしましたか、お兄さん」

「もしかして、姫終の血を吸っている時、最初から覗いていたのか？」

「……」

数秒の沈黙の後、叶瀬は逃げ出した。

しかし、姫終に回り込まれてしまった。

「叶瀬さん、少しお話ししましょう」

「あ、あの、お、お兄さん！」

「女の子同士、親睦を深めてきなさい」

羞恥で顔を真っ赤にしている姫終の迫力に涙目で俺に助けを求める叶瀬に、俺はそう言い残して社長室を出た。

『ご、ごめんなさいでした！』

『許しません！ 覗きは犯罪です！』

扉の向こうから、姦しい声がしばらく響き渡った。



キーストーンゲート襲撃事件の後、俺と浅葱はキーストーンゲートのケーキバイキングに来た。

放課後なので、制服姿の女子生徒たちのグループがいくつかある。

数は少ないものの男性の姿もあるが、どこか肩身が狭そうだ。

「んー、このイチゴショートのイチゴがクリームと良く合うわ」

「なら良かった。頑張つて育てたかいがあつたよ」

「え、このイチゴもしかして、古城のところの？」

「ああ、いくつかのフルーツを卸しているはずだよ」

「へー、やるわね。ここのお店って、素材に気を使っているんでしょう？」

なんてことのない、日常の会話。

仮にこの島が沈んでいたら、出来なかつたこと。

今回は上手くいった。

けれど、今後も守り続けられるだろうか？

「古城？」

「ん、何だ？」

「難しい顔をしてた。悩みごと？」

「まあ、悩みと言えば悩みなんだろう」

「あたしに言えないこと？」

浅葱の言葉に俺は頷くと、浅葱は「そっか」と呟いた。

浅葱は俺がこの島に来て、荒れに荒れている時の姿を知っている。

修正力によって思考能力を極端に低下させられ、アヴローラを助けられず、風沙を入院させる羽目になった愚かな自分と世界への怒りと憎しみに支配されているときの俺を。

「古城はさ、背負いすぎな気がする」

「……」

「ドロスもさ、あれって戦闘を想定しているでしょう？」

「……」

「ああいうのが、沢山必要なことが、この先起こるって教えているようなものだよ」

「すまん」

「ううん、古城のお陰で島が無事だった。けど、無理はしないで、それだけ。さ、食べよ！ アンタの奢りだけどね!!」

このあと、俺は一口ケーキ七個、通常のケーキ五個で止めたのだが。

浅葱は回りが引くくらい大量にケーキを食べて、店を泣かせていた。

後日、監視役の姫終が拗ねていたので、姫終、叶瀬、風沙を順番に個別でケーキバイキングに連れていった。

連日ケーキバイキングやキーストーンゲートの店を二人きりで回ったおかげで学園の生徒に目撃され、俺は四股かけている最低男と噂が流れた。

その結果、俺は教師達に生徒指導室へ事情を聞くために呼び出される羽目になった。更に浅葱に誤解されて、横つ面をひっぱたかれた。

怒って立ち去る浅葱になんて声をかければ良いか迷っていると、姫柊が呆れた表情でこう言った。

「自業自得です、先輩」

俺は叩かれた頬を押さえながら、今後増えていくヒロインのことを考えて、深く溜め息をついた。

束の間の平穩 姫柁雪菜①

キーストーンゲート襲撃事件の翌日、姫柁雪菜は自宅のリビングで朝食の準備をしていた。

前日の夜。監視対象の第四真祖、暁古城から「今回の事件のことを獅子王機関の三聖に報告するから、監視は休み」と言われた。雪菜は「監視と報告は、わたしの仕事です！」と古城に反論したが、その直後に自室のチャイムが鳴り、獅子王機関からしばらく体を休めるようにと命令書が届いた。そのため大人しく自宅で待機することにしたのである。

その後、古城が家に戻るときに「明日は風沙も部活で朝早いから、朝食は一人で食べてくれ」と告げた為、古城の家で朝食を食べることに慣れはじめていた雪菜は少し寂しいと思いつながら作った朝食をリビングのテーブルの上に置く。

とはいえ、久しぶりにする一人での食事だ。

雪菜は冷蔵庫から備蓄しているマヨネーズを取り出し、今作つたばかりの朝食にマヨネーズをたっぷり、たっぷりとのせていく。

過去に友人達に引かれてからは人前でやらないようにしていたのだが、久しぶりに思

いきりマヨネーズを食事にかけられるとあって、雪菜はちよつと興奮気味だ。「いい、いただきます」

本日のメニューは和食。日本人らしい白米、焼き鮭、納豆、味噌汁、ほうれん草のおひたし、卵焼きだ。

その全てに、山盛りのマヨネーズがのせられていて色々台無しになっているが、雪菜は気にせず朝食を頬張っていく。

オカズを食べる（マヨネーズたっぷり）。ご飯を食べる（マヨネーズたっぷり）。

「し、幸せ……」

ここ最近我慢していたせいで、雪菜は感動していた。

「ごはんのおかわりを」

攻魔師でもあるため運動量が多い雪菜は、一般的な同世代の少女たちに比べて食べる量は多い。

お茶碗にご飯を多めに盛り付けて、さらにマヨネーズを投下する。ご飯が見えなくなり、食事を再開しようとしたところで、自分の家の鍵が開いた音がした。

「……え？」

久しぶりのマヨネーズに浮かれて周囲への警戒が疎かになり、家の鍵が開けられることに気づくのが遅れた。

雪菜は未熟でも攻魔師。普段なら、余程の手練れでもなければ鍵が開けられる前
の気配に気づけたはずだった。

しかも、この気配は、せ、先輩!?

そう思ったときには遅かった。

「姫終、起きているか？ 喜べ、今回の一件で多少だけ姫終の月給が上がつ……
た、ぞ……」

書類が入っていると思われるA4サイズの白い封筒を掲げてリビングに入ってきた
古城が見たものは、限度を超えたマヨネーズを朝食にのせ、それを嬉しそうに食べてい
る後輩の姿だった。

ちなみに、この時の雪菜の頬には、よつぱりマヨネーズが付いていたのだが、朝食の
上なのっているマヨネーズの量が多すぎた為、流石の古城も「付いてるぞ」など言っ
て拭ってあげることができなかった。

「ひ、姫終」

「は、はい。先輩」

見ているだけで胸焼け起こした古城と、見られたくないものを見られて青ざめる雪
菜。

そして、古城が判決を下した。

「これから、姫終のマヨネーズは俺が管理する」

「ええっ、先輩！」

古城はそれだけ言うとテーブルに置いてあったマヨネーズをイベントりに放り込み、迷わずキッチンへ進む。

慌てる雪菜を放置して冷蔵庫を開け、凍りつく。

「何で、マヨネーズだけで冷蔵庫の八割が埋まっているんだよ！ しかも、色々メーカーがあるし!!」

「お願いです、待ってください！ 先輩！」

「面倒くさいから、冷蔵庫ごと預かる!!」

「や、止めてください!!」

こうして、この日から雪菜の一食に使えるマヨネーズの量は大匙一杯となった。

「せ、せめて大匙三杯に！」

「姫終、せめてそのパーティーグッズ用のお玉の半分くらいの大きさのプラスチック・スプーンを隠してから言いに来なさい」

どこで買ってきたんだ？ と呆れる古城と必死の雪菜。

結局、カロリー五割減のマヨネーズなら、大きめのカレースプーン三杯でも良いと許可をもぎ取った雪菜だったが、一杯が山盛りになるように手首のスナップを効かせての

せたことで、古城の怒りを買ってしまった。

結果、雪菜はマヨネーズに近づくこともできなくなった。

「……物足りないです」

「泣くなよ！ 十分多いだろうが!!」

だが、最終的には、落ち込んでいる雪菜の姿に根負けした古城が「週に一度なら」と条件をつけてたつぷりとマヨネーズを食べても良いということになった。

「狂気だな、この量」

「おいしいです。あ、先輩も食べますか?」

「いや、いい」

あーんのチャンスではあったが、古城は即座に首を横に振った。

束の間の平穩 藍羽浅葱 & a m p ; 叶瀬夏音

「あー、やっと終わった」

キーストーンゲート襲撃事件の後、浅葱に破壊されたキーストーンゲートの警備システム復旧の仕事が舞い込んできた。

普通の実力なら数日かかる作業も浅葱の手にかかれば数時間で終わるなんてことも多いが、今回は数が多かった為なかなか時間に時間がかかった。

「キーストーンゲートのケーキバイキングは延期かあ」

本来なら日曜日に行く予定だったが、キーストーンゲート襲撃事件とその復旧の影響で、学校帰りに行くことになってしまったのだ。

次の日曜日だとケーキバイキングが終わってしまったているため仕方がない。やや不満だが古城と二人で出掛けられるのなら我慢はできる。

浅葱は当日に着ていく服のことを色々と考えていたのだが、ふと最近古城の妹の風沙から借りた少女漫画で制服デートの話があったなど思い出し、頬を紅く染める。

二人で街を歩いて、クレープ食べてと妄想したのだ。

過去に古城と二人で放課後に街を歩いた時、大食漢な浅葱は大量のアイス、クレープ

などを食べ歩き、古城に「原作で知っていたけど、フードファイターみたいだ」と引かれていたことを知らない。

更に古城は、今回のケーキバイキングにいくにあたり、店側に事前の注意喚起をしていた。

過去のバイキングで浅葱が食べまくったおかげで料理不足が起こったことがあり、古城が気を使ったのである。

魔族には人間以上に食べる種族もいるので、魔族特区であるこの島の飲食店はその辺りも考慮している。

それはバイキングを行う店でもだ。

だが、暴食の女帝と影で非公式の呼び名をつけられている浅葱が来店すると知った店側は大忙しである。

「まあ、制服だから長居は余りできないけど、こ、今回こそは、古城に、あ、あーん、とか、で、出来たら良いなあ……」

古城にあーんをする瞬間を想像して悶える浅葱。

古城の周りにいる少女の中で、一番ピユアなのは浅葱なのかもしれない。

後日のキーストーンゲートでの制服デートは、少女漫画のような、とはいかなかったが、学生らしいデートと言えなくもなかった。

ケーキバイキングが終わった後に、追加でクレープとアイスも食べた浅葱を見た古城が、「相変わらず凄いなあ」と若干引いていたことに、浅葱は気づかなかった。



叶瀬夏音にとって、暁古城という人物の第一印象はヒーローだった。

五年前、修道院が異形の何かに襲われた時、助けてくれたのが古城だった。

妖艶な女性を連れた古城は連れの女性にニーナ・アデラードと孤児院の子供たちの護衛を任せると、異形と戦い勝利した。

戦いの一部しか見ていない夏音だったが、異形に襲われ、死が目前に迫ったときに助けてくれたまだ幼さを残していた古城の横顔を、今でも鮮明に覚えている。

ちなみに、この襲撃事件が起こった日。

絃神島から北西に二百キロ離れた上空二千メートルの地点で、巨大な天使が海へ目掛けて高エネルギー波を叩き込んだ。それにより偶々近くで活動していた国際海洋生物研究グループの船が津波に巻き込まれ、危うく沈没しかけた。

後日、グループの船が持ち帰った映像が原因で、世界中の政府要人、軍関係者、宗教

関係者が大混乱に陥ったりもしたが、諸悪の根源は何食わぬ顔で夏音が暮らす修道院の子供たちへの差し入れを作っていたそうなの。

「お兄さん」

「ん？ どうした。叶瀬」

「次、あそこが見たいです」

「分かった」

今日は、学校帰りに先日ウエディングドレスを着させておいて放置したお詫びに、夏音と古城は二人でキーストーンゲートに買い物に来ていた。

ケーキバイキングで古城に甲斐甲斐しく世話をされながら食べたケーキはとても美味しかった。

夏音は幸せな気持ちで、店を出ることが出来たのである。

そのあと、古城と夏音はいくつかの店をまわることにした。

「叶瀬、次は何処か行きたい所はあるか？」

「あ、それなら」

ケーキバイキングの次に二人が、向かったのは所謂猫カフェだ。

「いらつしやいませ。あ、社長！ それに夏音ちゃん」

「久し振りだな。人も猫も元気か？」

「はい、元気ですよ！」

ピンク色のロングヘアのウェイトレスの少女は、アホ毛をギョングン動かしながら、元気よく返事をする。

「頑張っているようだなによりだ」

「はい、ノノは頑張つて、社長に恩を返してみせます！」

「ああ、期待しているよ」

古城はカフェ店内を見て、なかなか賑わっている様相に内心ホツとする。

この店にいる猫たちは、全てではないが夏音が拾ってきた猫たちが多い。

修道院と兄妹たちが無事ではあるが、やはり捨て猫を見捨てられなかった夏音は猫を拾ってきてしまい、大人たちが困っているのを見た古城が資金援助をしてこの店を作った。

猫と触れ合える猫カフェと、犬や鳥たちと触れ合える動物カフェ。現在二つの店が営業し、共に里親募集も行っている。

「みんな元気そうだなによりだ。……だからな、もう少し寄ってきててもバチは当たらないと思うんだよ」

「お、お兄さん」

夏音は猫たちに好かれやすい。

今も五匹近くが夏音にすり寄っている。

だが、古城には一匹も近づかない。

前世で動物に好かれていた古城には地味にダメージが大きいのが、これは古城の中にいる眷獣が原因だ。

大人しくしていても、動物たちは敏感に感じとってしまふ。

最近ではチート能力を扱う古城自身の力も上昇したことで、猫たちは古城自身も強者だと察し、余計に近づかないようにしているのだ。

「ま、叶瀬が嬉しそうにしているから良いか」

古城はそう呟きながらも、自分を見ている猫に必死に猫じやらしを振る。

夏音はそんな古城を見て、可愛いと微笑んだ。

猫カフェを出た二人は、そのあと古城の家に向かった。

今日は義父の叶瀬賢生が仕事で家を空けるため、夏音は古城の家に泊まることになったのだ。

夕飯後、来客用に空けた部屋のベッドに夏音は横たわっていた。

「今日も楽しかったです」

夏音は、今の幸せを噛み締めていた。

五年前の事件、もしも古城が助けに来なかったら、自分は今頃死んでいたかもしれない。

「……お兄さん」

約十分ほど夏音はベッドに入っていたが、静かにベッドから起き上がり部屋を出ると、古城の部屋に向かった。

「叶瀬？」

「お、お兄さん、こんばんはでした」

古城の部屋をノックする直前で、夏音の気配を感じた古城が自室の扉を開けた。

「どうしたんだ？」

「あ、あの、一緒に寝たいです」

何かあったのか？ と疑問に思っていた古城は、夏音の言葉に固まった。

「だ、駄目でしたか？」

「……いや、分かった。頑張る」

古城は夏音が寂しいのだろうと思い、今日は一緒に寝ることにした。

「お兄さん」

「ん？」

「幸せでした。お義父さんとお兄さん。院長先生、凧沙ちゃん、雪菜ちゃん。皆と会え

て」

「それは良かった」

夏音の頭を優しく撫でる古城に、夏音は決意を込めて伝えた。

「儀式頑張ります」

その言葉に古城の顔が強張る。

けれど、夏音は古城に責めていないと伝えるために、両手を伸ばしてしっかりと古城の両頬を包み込む。

「わたしに必要なことだから、お義父さんは儀式を、お兄さんは耐えてくれている、です」

「叶瀬、……辛いなら」

「わたしは、大丈夫でした」

だから、と夏音は古城を抱き締めた。

明日からも頑張れるように。

「すまない」

古城の言葉に、夏音は微笑みで返した。

翌日、明け方までに起きて風沙に見つかる前に密かに夏音を部屋に帰そうとしていた古城だったが、夏音の癒しオーラが原因なのか古城はグッスリ寝てしまった。

目を覚ました古城を待っていたのは、般若の表情の風沙と能面のような表情の雪菜の二人から徹底的に痛め付けられることだった。

そんな三人を見て夏音はオロオロしていたが、古城が柔らかな声音で夏音に大丈夫だと告げながら笑うと、夏音もホッとしながら笑顔になり、今日も一日頑張ろうと思うのだった。

夏音の儀式悪夢の終わりも近い。

束の間の平穩 南宮那月

監獄結界の番人として人ととしての時を止め、空いた時間を教師として使った。教え子達を見送り続ける人生を受け入れた。

この選択を悔やんだことはない。
ないのだが……、

「古城」

「ん、なんだい？ 那月ちゃん」

教師をちゃん付けで呼ぶな。と普段なら言うが、今は自宅。

そして、久しぶりに私と古城の二人きりだ。

本来なら、あの転校生が監視として当人かその式神が側にいるのだ。

しかし古城は先の一件を解決したとして、あの転校生の給料アップと労働基準法に基づき休みの取得について、獅子王機関に命令書を作らせて転校生に渡した。

その結果、合法的に転校生が監視を休む日が出来た。今日がその日だ。

ちなみに転校生は古城の妹達に連れられて、買い物に行っている。

第四真祖の真の監視役は別にいるので、転校生が監視しなくても問題はない。

だが、表向きには転校生が監視役である。

本来なら歩く災厄の監視役に休みなど無いのだが、「やっぱり姫終も年頃だから、休みがないと可哀想じゃん」などと言う第四真祖の意思によつて与えられた。もつとも、転校生に隠れて行動しやすくするための布石でしかないだろうが。

ま、古城が本気を出せば、現在この島にいるピンからキリまでの監視役全てを無力化するのには容易い。

だが、今は。

「那月ちゃん、あーん」

「あーん」

休みの日だ。リラククスして過ごすとしてしよう。

「どう？ ケーキバイキングのケーキを一口サイズに再現してみたけど」

「悪くないな」

私の隣に座る古城は、私の口にそつと一口サイズのケーキを私の要望を通りに運んでくれる。

しかし、相変わらず良い腕だ。

夕食も作ってもらうか。

「次はどれがいい?」

「ふむ、モンブランにしよう」

指一本動かさず世話されるのも悪くない。

一日執事券か。誕生日やお返しに渡すと言われたが、ふむ……。

また厄介ことが起こるようだし、少し力を入れるか。

「ところで、古城」

「なに? 那月ちゃん」

「ナラクヴェーラの話は本当か?」

「うん、一応占いで確認してみたから間違いはないよ」

「あの未来を確実に予言する力か」

この教え子は世界最強の第四真祖の力だけではなく、どれか一つでも国家にとって脅威となるような非常識な力を数多く保有している。

その一つに100%当たる占いがあり、その占いに出了たのが……

「クリストフ・ガルドシュと黒死皇派、ナラクヴェーラ。本当にこの島に来るなら厄介だな」

「そうだね。アイランド・ガードも大変だ」

「……古城、お前はどうか?」

「流れに身を任せるかな」

困った顔をする古城に私は問いかける。

「お前はあの占いでは、自身の未来を占えない。だが、どうやったか知らないが、お前は未来を知っているな」

「敵わないな、那月ちゃんには」

「答えろ」

「知ってるよ。ただ、必ずその通りになるとは限らない。と言うか、もう変わりはじめている」

「具体的には？」

私の言葉を聞いて、古城は柔らかく笑みを浮かべ、

「俺が那月ちゃんとかうして仲良く二人きりでお茶をしていること自体あり得ないことらしいね」

「そうか……」

その言葉を聞いて、胸の奥がざわついた。

初めての経験だな。

「まあ、今は那月ちゃんとかうして居られるから、別に多少未来が変わっても良いけどね」

いざとなったら、全力全開で力押しするから、と物騒なことを言い出す古城。出来れば止めてほしいが、無理だろうな。

こいつが言つて止まる奴なら、ローマのコロッセオが破壊されたり、自由の女神が動き出して大暴れしたりはしない。

「いいのか？ お前が知っている未来の方が、より良い未来なんじゃないのか？」

「さあ、それは分からないけどさ」

古城は私の腰に手を回し自分に優しく自分へと引き寄せる。

「那月をこうして抱き締めることが出来て、今の俺は幸せだよ」

「——っ!? 馬鹿者!!」

私の耳元で普段よりも低い声で、私に囁く。

背筋に心地よい快感が走るが、私はぐつと奥歯を噛み締めて気をしっかりと持ち、扇子で古城の額を強打する。

「痛った!!」

「ふんっ」

危なかった。最近、古城はやたらとこういう手段で私の心をくすぐる。

「ま、未来は既に変わってるし、そんなに気にしなくていいよ。那月ちゃんが原因で未来は変わらないから」

「そうか、なら好きにさせてもらおう」

私はそう言いながら、口を軽く開いて古城に次を催促する。

「うん、次はどれが良い？ 那月ちゃん」

「紅茶のシフォンだ」

私は少しだけ考えた。

学生時代に古城が居たのなら、私は魔女にならなかつたのか、と。

普通の少女のように生きて、恋をして結婚を……

そこまで考えて、無意味なことだと首を横に振る。

「那月ちゃん？」

「少し馬鹿なことを考えただけだ」

そう言って、私は仮初の身体で仮初の時間を穏やかに過ごしていく。

目を覚ませば、絶対に手に入らない愛しい時間を。



「ふう、最近那月ちゃんが乙女ゲーにハマっているから低い声で囁いてみたけど、悪くない反応だった。ラブ度も上がっていたし、やはり那月ちゃんは乙女だな。高い金を払ってリデイに那月ちゃんのネット通販記録調べてもらったかいがあったな。さーて、あとは家に帰って那月ちゃんの好きそうな乙女ゲーを、つて電話？ ん、どうしたセバスニャン。え、人形師が？ あー。分かった今いくよ」

束の間の平穩 姫柇雪菜②

姫柇雪菜は監視役になる前、攻魔師見習い（当時）として自信を持っていた。

同世代で自分と同じくらいの実力者は数えるほどしかいなかった。

第四真祖の婚約者候補として、監視と抹殺任務の命令が来たときは驚いたが、同時に自信にも繋がった。

監視の技術は教わっていないので不安はあるが、

七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツァーの雪霞狼を渡され、それ相応に浮かれていたのは事実だ。

「はあ……、このあとどうしよう」

大量のマヨネーズをかけて、古城に叱り飛ばされたのが昨日のことだ。

雪菜は古城から獅子王機関の命令書を渡され、定期的に監視に休みもらうことになった。

雪菜は第四真祖の監視を一時的とは言え休んでも良いのだろうか？ と考え込んだが、古城に「常に気を張り続けては、何かあった時に満身に動けないぞ」と諭された。

とは言えここ数日で古城と共にいるのが当たり前になっている雪菜は、自然と監視が

休みの日も古城と行動を共にするつもりだった。

けれど蓋を開けてみれば、そうはならなかった。古城が「風沙と叶瀬と買い物にでも行つてくると良い」と、昨日の夜に四人で夕食を食べている時にお小遣いを雪菜達三人に手渡しながら言つたからだ。結果、風沙が久し振りのお小遣いに喜び、叶瀬と雪菜の二人をテンション高めで買い物に誘つてそのまま三人で街へ買い物に行くことになつたのだつた。

この日、朝から雪菜達三人は買い物に来たのだが、昼食を食べ終えた午後一時過ぎに、叶瀬は父親の秘書の女性が迎えに来て仕事の手伝いで抜けた。

そのあとは風沙に引つ張られるように、カラオケやゲームセンターを回つていたので、「ごめんね、雪菜ちゃん。秘書の人がお休みで家事が出来ないお母さんに呼ばれちゃつた」と、申し訳なさそうにしながら風沙も離脱していった。

雪菜は中途半端な時間に一人になつてしまった。

そして、雪菜はふと「本当に、このまま自分が監視役で良いのか？ 雪霞狼をわたしが使ひ続けても良いのか？」と自問自答をしながら街を宛もなくさ迷う。

暁古城、世界最強の第四真祖。

正直なことを言うと言つたと雪菜はお見合い写真を見せられた時も、初めて顔を会わせた時も、雪菜はいざというときは暗殺出来ると確信していた。

自分を案内してきたセバスニヤンの方が脅威だと感じていたほどだ。

けれど、殲教師とアスタルテとの戦いで、古城がアスタルテの一撃から自分を助けるために放った一撃は雪菜に衝撃を与えた。

古城の動きは素人の動きだった。

しかし、獣じみながら、利になかった一撃でもあった。

普段の動きから、古城が武術の素人で武術の才能を有さないのを雪菜は分かっていた。だが、戦っている古城の動きは強者の動きだった。

「結局、アスタルテさんを押さえられなかった」

古城に信用されてアスタルテを押さえを任されたのに、要石があるフロアでの戦いの時、雪菜は役目を果たせず、アスタルテが殲教師をかばうのを阻止できなかった。

古城が使った精神コマンド必中の効果で、アスタルテのただ体を強引に割り込ませるだけの“かばう”では効果がなかったが、それでも雪菜は気にしていた。

自分は監視役としてふさわしいのか？ いざというときに暗殺なんて出来るのか？と。

「ねえねえ、お嬢さん。ちよつと良い？」

「結構です」

そんな時だった。チャライ男に声をかけられたのは。どうやらナンパのようなので、雪菜は即座に断った。

この街に来て、凧沙や叶瀬と行動しているときにナンパされることは多い。

「えー、良いじゃん。こんなところを一人で歩いているのは、ナンパ待ちでしょ？」

男に言われて周り見回すと、古城から近づかないように言われていた治安の良くない場所だった。

雪菜は内心かなり焦った。

監視対象ではあるが、年上で世間知らずの自分の面倒を見てくれている相手が「近づくな」と言った場所にいつも間にか迷い混んでいたのだ。

また、古城に怒られると、雪菜は慌ててその場から離れようと踵を返したのだが……「ちよつと待ってよー！」

と、男に手首を捕まれる。

雪菜が反射的に、男を投げ飛ばそうとした瞬間だった。

「馬鹿、止めろ!!」

「すみません、お嬢さん！ コイツには良く言い聞かせるので、どうかご容赦を!!」

突然現れたナンパ男の仲間らしき二人のチャライ男がナンパ男の動きを止め、雪菜に謝罪した。

「あんだよ、二人とも邪魔すんなよ」

「止めろ馬鹿！」

「このお嬢さんは、暁さんが面倒を見てるお嬢さんだ！」

それを聞いた瞬間に男は凍りつき、雪菜から手をゆつくりと離して、流れるようにその場で土下座した。

「す、すみませんでした!! 勘弁してください!!」

「本当にすみませんでした！」

「俺達からもお願いします！」

「え!? え!?」

雪菜は混乱しながらも、「気にしないでください」と告げて足早にその場を後にした。見覚えのある場所に移動するまでの間、すれ違うチンピラやチャライ男、強面の男達から深く頭を下げられ、挨拶を受け続けた。

「おはようございます!!」

「御勤めご苦労様です!!」

「お嬢様、ご機嫌麗しゅう!!」

男たちの行動に、雪菜はかなり戸惑った。

身に覚えはないが、先程の男達の「暁さん」という言葉で、雪菜は古城が何かしたの

だろうと察した。

「つ、疲れた」

「お疲れ様」

見覚えのある道まで戻ってきて何気なく呟いた言葉に返事がくるとは思ってもおらず、しかも突然現れた気配に雪菜は一瞬で戦闘態勢に入った。

「ああ、ごめんなさい。驚かしたわね」

声の主はアメジストのような美しい髪を持つ、大人の魅力が溢れ出ている修道女だった。

「さ、遠慮しないで食べて」

「あ、ありがとうございます」

雪菜は最初こそ目の前の修道女を警戒していたが「古城に雇われている」と言われ、彼女が叶瀬や修道院の子供達、古城と写っている集合写真を見せられてので警戒心を解いた。

その後、修道女に話がしたいと引つ張られるかのように、雪菜は修道女の女性と近くのアミレスに入り、修道女に奢りだとお茶と軽食を頼まれてしまった。

雪菜は遠慮しようかとも思ったが、注文が済んでしまったのでご馳走になることにした。

「あ、自己紹介がまだだったわね。ジリオラ・ギラルティよ」

「わたしは、姫終雪菜で……」

雪菜はそこまで言いかけて固まる。

目の前な女性が何者なのか思い出したからだ。

「クアルタス劇場の喜劇?！」

「あー、うん。自分で名乗っておいてアレだけど、やっぱりそれが印象的よね」

苦笑い気味のジリオラに雪菜はキョトンとする。

「あの一件はね。古城発案なのよ」

「——ファツ?!」

約五年前、古城がまだ人間だった時のことだ。

ジリオラというキャラのデザインがそこそこ気に入っていた古城は彼女をスカウトしに行った。

「ちようど、馬鹿な皇太子と王族達が暗殺部隊を送り込んできてね。古城が全員蹴散らしたのよ。まあ、獲物を取られた私がお仕置きしようとしたら、モノの見事に返り討ちにあつてね。そのあと雇われたの」

「そ、そうですか」

「それで、女性に優しい古城は私に喜劇を見せてくれたの。世界的にも有名な正義の団体——葉っぱ隊を結成させたわ」

「……………」

ニコニコと笑みを浮かべるジリオラと、強張った表情の雪菜。

本来なら惨劇となる出来事は、泥を被るなら王族だろうと男が泥を被るならべきだと判断した古城によつて捻じ曲げられた。

仕返しとして、また同時に世界を平和にするための策として、葉っぱ隊の結成が古城発案で行われた。

皇太子を洗の……もとい教育して、護衛や暗殺部隊も含めてクアルタス劇場にて錬金術で作った特殊な葉っぱ型の装備品を股間に張り付けて歌わせ、躍り狂わせた。最後は世界平和を目指す慈善団体“葉っぱ隊”の結成を宣言させた。

そのまま、葉っぱ一枚を股間に身に付けて、皇太子と護衛、暗殺部隊は世界を平和にするために旅立った。

今現在はアフリカの武装勢力を蹴散らし、平和維持活動をしている。

葉っぱ隊の戦闘力はアルディギアの聖環騎士団に匹敵すると言われている。

当時、あのニュースには世界が仰天し、爆笑した。

「ジリオラは彼等を紹介しただけで、某小国から更に恨まれたが罪には問われなかつた。」

「皇太子達を教育した古城は姿を消し、獅子王機関などに怪しまれても知らぬ存ぜぬを通した。」

その後ジリオラは古城に雇われて娼婦を辞め、表舞台から姿を消した。

「ジリオラは今、叶瀬の居た修道院の護衛で、たまになんちやつて修道女になっている。その他には古城の指示で暗部（暗殺は無し）みたいなこともしている。」

「それで、監視役のお嬢ちゃんは何を悩んでいるのかしら？」

「監視役と言われて驚き、お嬢ちゃんと呼ばれて雪菜はムツとしたが、それを押さえて雪菜はポツリポツリと自分が古城の監視役で良いのだろうか？ と、呟いていた。」

「もちろん、雪菜はさわり程度しか話すつもりはなかったが、元高級娼婦の話術にあつさり負けて、言うつもりがなかったことまで喋っていた。」

「自信がない、ね」

「はい。本当に先輩の監視役は私で良いのかなって」

「うーん、大丈夫じゃないかしら？」

「何故、と聞いても」

雪菜の問いに、ジリオラは苦笑いを浮かべる。

「出来ることなら、初めて血を吸うのは姫終が良い」

「……………え？」

「古城が社長室で仕事しているときに言ったのよ。貴女が来る何日か前にね」

「……………」

「一目惚れかもしれないわね」

雪菜はジリオラの言葉を聞いて、顔を真っ赤にした。

お見合い写真は冗談だと思っていた。

けれど、

「あ、今なら古城は社長室にいるんじゃないかしら？」

「——っ」

「話してきたら？」

「は、はい」

ジリオラは、ファミレスを出る雪菜の背中を見てニヤニヤと笑いながら、「古城、早く作業終わらせないと大変よ」と、呟いた。

雪菜が走るのではなくてタクシーを使えばよかったと後悔したのは、暁カンパニーに着いたときだった。

渡された通行書を警備のアイルーに見せて裏口から中に入り、真っ直ぐ社長室へ向か

う。

雪菜は汗だくになっていたので、社長室の前でハンカチで出来るだけ汗を拭き、深呼吸をしてからゆつくりと社長室の扉を開けた。

この時、雪菜は古城が自分に一目惚れしたかも、という言葉に自身が思っている以上に冷静さを失っていた。

普段の雪菜ならば、扉をノックしたはずだ。

まあ、仮に雪菜がここで社長室の扉をノックしても、このあと起こる出来事は大きく変わらなかっただろうが……

「先輩、お話が——」「スワニルダ！ 尻をもっと高く上げろ」え？」

「命令受諾、こうでしようか？」

「そうだ、それで良い見易いぞ。あと少しだから待っているよナタナエル。あ、この尻はもう少し丸みがないと駄目だな」

社長室の扉を開けた雪菜の目に飛びこんできたのは、白銀のフォルセット姿の美少女を床に四つん這いにさせ、手に持つ大型の白い人形の尻の熱心に紙ヤスリで撫でている古城の姿のだった。

古城の近くにスライムみたいなのが控えていたが、雪菜は目の前の衝撃的な光景が原

困で気づかなかった。

「む、スワニルダ、もう少し上半身も反らしてくれ。背中のラインも拘りたい」
「命令受」「しなくて良いです。そんな命令」諾

雪菜の氷点下のような冷たさを含んだ声に文字通り凍りつく古城。

錆び付いたブリキのオモチャのようにギギギと、声が出た方にゆっくりと顔を向ける。

「先輩」

「は、はい」

「何をしているんですか？」

この日、絃神島に悪鬼羅刹が降臨した。

「なるほど。つまりこの二人、二人？ はアスタルテさんの姉妹ですか」

「うーん、腹違いの姉妹。いや、ホムンクルスではないから、従姉妹かな？」

雪菜は床に正座している古城の正面に仁王立ちしながら、今回の経緯を聞いた。

ちなみに古城の左頬は真っ赤に腫れている。

「スワニルダさんとナタナエルさんのお二人はこれからどうするのですか?」

「ウチか那月ちゃんに頼むつもりだ。ナタナエルは錬金粘土で身体のデータを切って取り込ませて、人の形にする感じだ」

なるほど、と雪菜が頷くと同時に、それまで黙っていた銀のドレスのスワニルダが自分をじつと見つめていることに気づいた。

「あ、あの何か?」

「質問があります」

「はい」

「貴女がマスターの奥様ですか?」

「ええっ!?!」

「す、スワニルダ!!」

「マスターが言っていました。姫終は俺の大切な女性だと」

「待ってくれスワニルダ、オクチチャック!」

「——っ!?!?」

この後、国際的に指名手配されていた人形師の人形が街で暴れたと聞いた那月が古城の元に「何か知らないか?」と聞きに転移魔術で社長室に顔を出すのと、顔を真っ赤に

した雪菜が照れ隠しで古城の顔面に回し蹴りを叩き込んだのはほぼ同時だった。

後日。

「あの、姫終と那月ちゃんに見られながら、ナタナエルの身体作るのが恥ずかしいんだけど」

「私はナタナエルの身体のモデルのスワニルダの保護者だ。貴様が不埒なことをスワニルダにしないか監視する義務がある。それと教師をちゃん付けするな」

「わたしは、先輩の監視役です。……スワニルダさんにいやらしい事をしたら、刺しますからね」

古城は溜め息をつきながら、錬金粘土でスワニルダをモデルにナタナエルの身体の内となる人形を作った。無事にナタナエルは人の姿にもなれるようになり、スワニルダとナタナエルは那月の家で世話になることになった。

開幕

「ふん、こんなものか」

南宮那月が港湾地区の古い倉庫を襲撃したのは、その日の深夜のことだった。

古城の占いに出た密入国の犯罪集団が武器の闇取引の裏付けをとり、アスタルテと二匹のアイルーと共に突入した。結果、倉庫内にいた八人の男達はサクツと無力化された。

「ここを潰したところで、たいした意味はないのだろうがな」

とはいえ、大人の女性として仕事をしないわけにはいかない。

古城の口振りでは、ナラクヴェーラと古城が戦うのは間違いない。

間違いないが、

「少しでも、クリストフ・ガルドシユの戦力を削っておけば古城も動きやすいだろ。奴のことだ、ナラクヴェーラを倒した後は黒死皇派の残党を始末するために動くつもりだろう」

その手間を省いてやろう。

もちろん、打算はある。

「アスタルテ、スワニルダとナタナエルに明日の授業の支度をさせておけ」
「命令受諾」

「先日の一〇日執事の時は、時間の都合で背中中のマッサージはできなかつたからな」
頬を少しだけ紅く染めながら、前々回のマッサージを思い出す。

あれは、悪くなかつた。

那月はこのあとも黒死皇派に關係していそうな犯罪集団をしらみ潰しに襲撃し、その全てを完膚なきまでに叩き潰した。



「へえ、なかなか可愛らしいお菓子じゃないか」

「お気に召したのであれニヤ、幸いですニヤ」

オシアナス・グレイブの屋上のデッキで、二人と一匹が顔を会わせていた。

一人は金髪碧眼の美しい男。彼は愛船にテロリストと古代兵器を乗せて遊びに来た、傍迷惑男だ。

アルデアアル公デイミトリエ・ヴァトラーである。

彼は第四真祖になってしまった暁古城の配下のコックアイルーが作った、古城の贈り物であるチョコバナナを味わっている。

なぜ、ここにコックアイルーがいるかと言うと、記憶が曖昧な古城が「そう言えば、ヴァトラーはチョコバナナ好きだった気がする」と唐突に思いだし、

機嫌取っておくかー、という軽い気持ちで最高級のチョコとバナナをアイルーに持たせて、ヴァトラーの元へ送ったからだ。

突然、穴も開けずにデツキの床から出てきたアイルーに驚きながらも、第四真祖から送られてきた物にヴァトラーは興味を持ち、想像を遥かに越える美味しさに機嫌が良くなった。

「来たかい？ それで、僕の要望は叶えられたのかな？」

「日本政府からの回答をお持ちしました」

「聞かせてくれるかな？」

ヴァトラーに近づいてきた黒髪のポニーテールの美少女。煌坂紗矢華はチョコバナナをゆつくり味わう（意味深）ヴァトラーの姿に微かに眉をひそめるが、淡々と日本政府からの回答を伝える。

「本日午前零時をもって、閣下の絃神島魔族特区への訪問を認証。以後は閣下を聖域条

約に基づく戦王領域からの外交特使として扱う——とのことです」

「分かった。それで、君が第四真祖の手紙に書いてあったお目付け役かい？」

ヴァトラーの言葉に煌坂紗矢華は驚く。

第四真祖がアルデル公に手紙を出していた!? いつの間に!?

獅子王機関から、第四真祖がアルデル公に手紙を渡したとは聞いていない煌坂は一瞬動揺したが、直ぐに平静を装う。

「安心しなよ。大人しくはしているよ」

——だって、愛しの第四真祖が僕をしつかりと認識してくれているのだから。

乙女を蕩けさせる笑みを浮かべるヴァトラーだったが、煌坂はそれに嫌悪感を覚えた。

煌坂は淡々とヴァトラーに釘を指しておく。

「私は六式重装降魔弓の所持を許された攻魔師です。私の判断で閣下を討ち滅ぼす権利が与えられていることをお忘れなきよう」

「あははははは、手紙に書いてあった通りだね。面白い気に入ったよ、よろしくね。第四真祖の三人目の花嫁」

「……………え？」

煌坂は言われた意味をようやく理解して、間拔けな声をだした。

「閣下、それはどういう意味でしょうか」

「ふふふ、本人に聞くと良いよ」

煌坂の問いを流して、ヴァトラーはコックアイルーが作ったイチゴチョコを使ったチョコバナナを味わう。

「甘酸っぱいね。それがまた良い」

煌坂に見せつけるように、ねつとりとチョコバナナを食べるヴァトラーにげんなりしながら、これ以上は無駄だと思い、口をつぐんだ。

そして、煌坂は一枚の写真を取り出した。

その写真には学生服を着ている暁古城が写っていた。

「第四真祖、暁古城。アンタはやっぱり全部知ってて私に……」

煌坂は眩き、決意を新たにして胸に写真をしまった。

朝の一幕

昨夜は那月ちゃんがドカンドカントロリストを叩きのめし、ヴァトラーと煌坂が島にやつて来た。

そんな中、俺は今後のことを考えていてなかなか寝付けなかった。戦王領域からの使者として、危険な玩具を持ってヴァトラーが来る。

出来るなら「来ないで下さい」と言いたいが、言っても意味はないだろう。

仮に島から逃げ出しても、文字通り蛇のように追いかけて来るはずだ。

なら、この島で原作にそいながら、ナラクヴェーラを破壊した方が良い。

それと、もう一つの懸念は姫終のルームメイトの煌坂紗矢華だ。

彼女と俺は幼いころに会っている。

少しでも、男性恐怖症を緩和するために介入したのだが……

「んあつ、もう朝か」

結局俺はなかなか寝付くことができず、寝不足になった。

そして、寝ぼけながら何時ものように風沙を部屋に起こしに向かい、テーブルに置かれている四人分の朝食に気づかずいつものように風沙の部屋の扉を開けてしまった。

「風沙、起きてるか？」

目を擦りながら部屋の中を確認すると、そこにいたのはベッドに腰を降ろした妹の風沙と、

「せ、先輩!？」

「お、お兄さんっ」

立っている下着姿の姫終と叶瀬がいた。

姫終は白いスポーツブラかな？

叶瀬はちよつと高級感のある青い上下の下着だった。

部屋の時が止まるが、それも一瞬。

「二人とも、綺麗だ」

俺の思わず出た言葉が聞こえたのだろう。

姫終と叶瀬は顔を紅くした。

あ、これって回し蹴りイベントか！ 思い出し即座に俺は逃げようとして。

「こ、古城くん、なにやってんの!？」

「す、すまっ!？」

風沙のその言葉が引き金になり、姫終が反射的に動いた。

本人もあつて顔をしていたが止まらない。

両腕で胸を隠し、音もなく旋回した姫柊は、そのま、俺に原作通りに後ろ回し蹴りを繰り出してきた。が……

「なんのっ!」

「ええっ、そんな!?!」

反射的に姫柊の後ろ回し蹴りを右手で掴んで防御しようとした。

だが、俺は自分の身体の現状を忘れていた。

寝不足なうえ、寝起きで身体に思うように力が入らないことに。

その結果、悲劇が起きた。

姫柊の回転する力と俺の回し蹴りを受け止める力は、姫柊の回転する力の方が僅かに強かった。

姫柊の勢いに引つ張られ、俺はバランスを崩す。

姫柊の踵を掴んだまま、身体が持つて行かれる。

姫柊も片足を上げている状態で、俺に踵を引つ張られバランスを崩し。

「どわっ」

「きやっ」

どうして、そうなったか分からないが。

「いったー、ん？ 柔らかい？ てか、何故視界が暗い？」

「せ、先輩!! 喋らないでっ」

「はっ？ ケボツ、埃か？ 鼻に、って、姫終どこだ？」

俺はうつ伏せで倒れたようでも、どうにか、顔を上げていると、目の前は真つ白だった。

文字通りの意味で。

「せ、先輩……………」

目の前に広がる▽の布地。その北側に広がる肌色の草原。

泣きそうな顔で俺を見詰めている姫終。

俺は同じくうつ伏せに倒れた姫終の股の間にダイブしたようだ。

「こーじょーうーくーん……………」

頭上から聞こえてくる地獄の底から聞こえてきそうな、愛する妹の声。

俺はとりあえず、妹に話し合いを持ちかけた。

「あー、風沙。俺には弁護士を雇う権利が」

「あると思うの？」

「はい、すみません」

俺が最後に見た光景は、制服姿の妹が高く右足を掲げて俺に踵落としを叩き込むとこ

ろだ。

第四真祖でも当たり処次第で、一般の女子中学生の一撃で気絶するんだな。

登校

「あ、あの、お兄さん……頭、大丈夫ですか？」

「叶瀬、大丈夫だ。けれど、その聞き方は止めてくれ」

通学に使っているモノレールの車内で、制服姿の叶瀬が俺を見上げながら心配そうな表情で訊いてくる。

ちなみに、右側隣に叶瀬。左側隣に雪菜。正面の座席には風沙が座っている。

「あの、先輩……本当に大丈夫ですか？」

雪菜も心配そうに俺を見上げる。

「ああ、姫終も悪かったな」

「い、いえ、あ、あのことは、もう怒っていません」

「そうなのか？」

見るだけならまだしも、顔をデルタ地帯に突っ込んだのに。

「はい、先輩がいやらしいのは最初からわかっていましたことですし、警戒を怠ったわたしの責任です」

不穏な空気を感じたので、俺は牽制球を投げることにした。

「姫終、続く言葉次第では俺も覚悟を決めるぞ？」

「いえ、なんでもありません」

「古城君！ そんな威圧したら駄目だよ！」

即座に危険を感じて、何も言わない姫終を見た風沙が俺に怒る。

「いや、姫終が照れ隠しで俺が故意に風沙の部屋に入って下着姿を見ようとした、みたいなことを言いそうな雰囲気だったから、違うぞ、と言う意味を込めただけだ」

「古城君の言い分はわかるけれど、雪菜ちゃんにあんなことをしたのが故意じゃなかったら、何なの？ あんなダイブは漫画でも見たことないよ？」

この世界には、あの漫画は存在していない。

だからこそ、俺のラッキースケベは故意のように見えたのだろう。

とは言え、事故だと言うことを証明しておいた方が良いな。

「あんな、風沙」

「なに？」

「パンツが見たくなったら、2人（雪菜と叶瀬）をお願いして見せてもらえばいいから、故意であんなことはしない」

「——今すぐ雪菜ちゃんとかなちゃんなら離れて」

氷のように冷たい声を発しながら、ゴキブリを殺すような目で俺を見てくる風沙。

うん、絶対に言葉を間違えたな。

ちなみに、雪菜は軽蔑する眼差しでこちらを見ており、叶瀬は恥ずかしそうにうつ向いていた。

▼△▼△▼△

さて、学校に着くと浅葱と鉢合せたので、浅葱が持っていたバックを持ってやる。

「助かるわ。ロッカーの前に置いておいて」

「大変だな、築島に頼まれたのか？」

「うん。学校の備品だけじゃ数足りないしね」

軽く球技大会の話をしながら教室へ向かう。

「おはよー」

「あ、おはよう。古城くん、浅葱」

「お倫、おはよう。頼まれたもの持ってきたわよ」

教室に入ると、クラスメイト達から「社長ー」とか「おはよう」とか挨拶が飛んでくる。

「おお、ありがと、浅葱。しかし、良いタイミングね」

築島の言葉に浅葱が首を傾げる。

「実は今球技大会の参加種目とメンバーが決まったところなんだよ」

そう言ってきた短髪でチャラそうな感じの男子生徒の名は矢瀬基樹。

浅葱の幼なじみであり、俺……第四真祖本当の監視役だ。

「ああ、出来れば楽なのをと頼んでいたけど、俺の参加するのは何になった？ 身体能力のこともあるし」

「親友、安心しろ。あれを見ろ」

「バトミンントンの男女混合ダブルス!? あたしと古城が!」

「うーん、まあ、バトミンントンなら安全か」

驚く浅葱と原作通りかと心の中で呟く俺。

俺の身体能力がその辺の魔族以上なのは周知の事実だ。

体育の授業は教師からも加減するように言われている。

その為、球技大会も場合によっては教師側と話して見学することも検討していた。

だが、那月ちゃんから「参加しろ」と命令されたので、俺は苦笑いを浮かべながら参加することになったのだ。

「ま、分かったよ。バトミントンだな。浅葱、頼むな」

「う、うん。いいけど。そんな簡単には決めていいの？」

「おう」

「うん。スムーズに決まって良かったよ、古城くん。頑張つてね」

「おう、あまりやったことはないが」

「大丈夫、浅葱が得意だから」

「そうか、なら放課後教えてくれ」

「う、うん。分かった」

「あ、親友。必殺技は使用禁止だからな」

「ねーよ、必殺技なんて」

「いやいや、古城くん前に授業のサッカーで、チームみたいなシュートでゴールネット駄

目にして、先生に怒られたでしょう」

築島と矢瀬に指摘されて、思い出した。そんなこともあったような気がする。

「気を付けるよ」

「お願いね。古城くんが出ると分かって、実行委員会の会議が阿鼻叫喚だったから」

「え、俺って、そんなに危険生物扱いされてるの？」

『『『うん、割りと』』』』

クラスメイト達からの言葉にガツクリ肩を落とす。

避けられたりしていないから、その辺の感覚を麻痺させられたと思っていたけど、まだ駄目だったか。

アヴローラを取り戻した時のための布石なのだが、まだ足りないみたいだな。

アヴローラには普通の女の子としての生活をしてもらいたい。

故の馬鹿げた力を持つ人間も中身はお前達と変わらないぜ！ 作戦だったのだが、まだまだだったか。

「ふうむ、危険生物イメージを払拭するために何かするか」

『『それは止めてください!!』』』

築島は苦笑いし、矢瀬はしようがないなという表情をうかべ、浅葱は呆れていた。

「ともかく、バトミントンは普通に頑張ってるね。振りじゃないからね？ 分身も加速も

幻術も禁止だからね？」

「分かってるよ、築島。安心しろ」

割りと考えて学園生活していたけど、そんなに心配されるようなことしたかな？

俺は首を傾げながらも、ヴァトラーの一件と球技大会のスケジュールを考えるのだった。